三代目・木村半兵衛の日誌（明治六～一五年）にみる栃木県内、地元での移動および東京との往来における交通手段の変遷

――専ら人力車から明治一〇年代は乗合馬車と蒸気船の普及拡大――

麻生　千明
元・足利大学教授

Transition of Transportation Facilities Revelled in Third Generation KIMURA HANBEI's Diaries Meiji 6~15

Chiaki　ASOH

Abstract

Great Commerce HANBEI KIMURA,living　in Omata village have written several diaries in early Meiji-Era. He was appointed school district control of Asikaga area Meiji 6 Year. As school district control, he run around Tochigi prefecture and Asikaga area. Transportation facilities are almost rickshaw or walking. Meiji 10 year, He resigned school district control and pour energy into bank establishment. And then,he often go to Tokyo. Else his family, relatives, acquaintance go to Tokyo. Transportation facilities of going to Tokyo are almost rickshaw in early Meiji-era. But later, carriage or steamboat are broadly used. And Meiji 16 year, railway train opened among Tokyo and Kumagaya,,Honjou etc.

Keywords: HANBEI KIMURA's diaries, Transition of Transportation Facilities,rickshaw,carriage,steamboat,

はじめに

小俣が生んだ豪商、木村半兵衛（三代目）は、学区取締に任命になった明治六年から急逝する明治一九年三月まで毎年日誌を書き残している。前稿(一)では、半兵衛の日誌を資料に、年頭の諸行事、年中行事（国の祝日、宮中行事）、地元神社の祭礼、東京や最寄りの群馬・栃木両県内における名所の観光、行楽、寺社の参詣、温泉場への湯治等について考察した。

本稿は、半兵衛の明治六～一五年の日誌(二)を資料に、半兵衛の学区取締時代における栃木との往来や担当学区内での学校間の移動手段、第四十一国立銀行開業前後以降の栃木本行への往来や銀行足利支店への通勤状況、家族の診療や知人宅の訪問、行楽等、木村家の私生活面での足利町や遠隔地との往来、また半兵衛をはじめいろいろな人々の東京との往来における交通手段の実態と変遷について考察するものである。その点については、サブ

タイトルに示したように当初は専ら人力車であったが、明治一〇年代に入り乗合馬車や蒸気船の利用が急増する。さらに明治一六年には東京～熊谷間に鉄道が開通、上京の際に鉄道利用がみられるようになる。なお鉄道に関して東北本線の埼玉県と宇都宮を結ぶ「第二区」の路線について、半兵衛らは産業振興の観点から熊谷から足利、栃木等の織物都市を経由して宇都宮に至る路線を主張するが、大きく迂回を要するその主張は、日本全体の「幹線」という趣旨から受け入れられない結果となったが、そうした鉄道誘致運動が幹線の支線として両毛鉄道敷設の下地になったといえよう。なお明治一六年以降の考察については稿を改めることとする。

序章　明治に入り人力車が普及

江戸時代は、武士は参勤交代など遠距離移動があり、また迅速に移動する場合は早馬、あるいは早駕籠等を利用していた。一方、庶民も伊勢参りなどの寺社詣でや湯治など、旅をするようになったが、ほとんどが徒歩であった。(三)それが明治に入ると人力車が普及するようになる。

半兵衛の日誌をみても、ある程度距離のある所への移動手段は大抵人力車であった。人力車とは、文字通り人力で人を輸送する車で、日本語では略して「人力」、「力車」、「人車」等とも称す。また「俥」という漢字も人力車を意味した。半兵衛の日誌では「人力車」、「人車」、「腕車」等の表記もみられるが、大抵は「仂車」と表記されている。「仂」は造字であろう。また「乗車」、「発車」、「車夫」、「二人輓」等の表記によって人力車の利用が確認される。人力車を曳く人を「車夫」、あるいは「車力」と称したが、半兵衛の日誌には「車夫　緑町重吉」、「車夫　五郎平」など、利用した人力車の車夫の名前が表記されているケースが少なくない。なお英語の Rickshaw（リクショー）は「リキシャ」を語源とする日本語由来の英単語である。

ところで人力車の発明は、記録上では和泉要助、高山幸助、鈴木徳次郎の三名が明治政府から認定されている。そして明治二年（一八六八）に右の三名が人力車を完成、翌明治三年（一八六九）に日本橋で開業されたが(四)、より詳細に言うと和泉要助が人力車を考案し、八百屋の鈴木徳次郎が実験し、高山幸助が製車したという。そして翌明治四年（一八七〇）一月には横浜から川崎、藤沢間で人力車営業が開始され、同年夏頃からは横浜で人力車が流行、さらに大阪でも普及するようになったという。(五)しかし特に東京での人力車の普及は著しく、明治九年（一八七六）には東京府内で人力車の台数は二万五〇三八台と記録されている。それまで主要な乗り物だった駕籠は全く駆逐され（ただし半兵衛の日誌をみると、病人等の搬送に駕籠が利用されている。）、駕籠かきから人力車夫になった者が多かったという。ちなみに明治一六～二〇年の東京府の人力車数は以下のごとくである。(六)

	総数	一人乗り	二人乗り
明治一六年	二八〇五五	七一〇二	二一〇四三
〃一七年	二九七九六	七四八三	二二三二三
〃一八年	三一八三六	八一九九	二三六三九
〃一九年	三二七九二	九四八六	二三三〇六
〃二〇年	三三二四七	一〇一〇四	二三一四三

人力車夫は都市に流入した下層社会の細民の主要な家業となり、明治二〇年代には東京市内に約四万人余も存在したという。現在は、日常生活において人力車を利用することはないが、浅草、京都などの観光地や温泉街等において観光客用のレトロな乗り物として人気を博している。

第一章　学区取締としての活動期（明治六～一〇年）における栃木町との往来および学区内（足利郡、梁田郡）での移動手段

一．県官の出役の場合は「人力車」での移動等を明記

木村半兵衛は明治六年（一八七三）三月に学区取締に任命になる。学区取締としての任務は多岐にわたるが、毎月、栃木町で開催される学区取締会議に出席、県の教育政策を実施することで、栃木町にはしばしば赴いているが、移動手段は専ら人力車であった。栃木県でも人力車は明治五年頃に現われ、「明治六年調の『栃木県一覧概表』には八三三台が記録されており、・・・足

利郡では明治八年の八六台から明治十七年には足利町だけで二〇九台に増加している（『近代足利市史』第一巻）」（七）と人力車は急増しつつあった。

半兵衛の明治六年の日誌（『學區日誌』）は、主に教育に関する県の口達や文書類が記録されているが、また県官や学区取締等の行動の記録もあり、それらがほぼ日付順に記載されている。ただし各所への移動については「出發」、「出縣」、「出役」、「出張」、「巡回」、「帰村」、「帰宅」等、ごく簡単な表現である。遠隔地への移動は当然人力車であっただろうが、移動手段についてはほとんど記されていない。ただし県官の出役の場合は人力車での移動が明記されている箇所もある。例えば六月六日、柳元少督学が足利地方の学校巡回を終え、「午前十時人力車ニ御乗栃木縣へ御帰行被遊候也」とあり、九月一日は「午前十一時学務御掛手塚信敬殿御廻村山木屋へ案内致ス」と県の学務掛手塚信敬が出役、廻村、小俣村の山木屋に案内、翌二日は「午前八時頃御出役人力車ニ乗し足利町へ御出行也」とある。一〇月一三日は「梁田学校見分午後四時手塚公佐野公明日人車ニテ御出張」と県の学務係手塚公と佐野公の二人が人力車で出張したことが記されている。一二月一四日は県の学務掛渡邊邁が出役、「渡部公小俣学校御見分之上学校開業式ヲ行ヘ午後三時發車五十邨学校御立寄御見分」、翌一五日は「足利学校分校とも三カ所御見分夫〻午前十一時後八木宿へ發車正十二時八木学校へ御立寄午後二時渋垂村へ御越候」と「發車」との表記で人力車を利用したことが記されている。「八木学校へ御立寄」、「渋垂村へ御越」等とあるが、一連の人力車での移動であったと思われる。

明治七年の日誌（『学務雑誌』）になると、行動に関する記述がやや詳しくなる。例えば五月は「七等出仕　柳川安尚殿　権大属　渡部邁殿」両名による管内学校の巡視が行われる。五月一〇日は地元の学校周旋人や村用掛等が出迎えるなか「同午十二時五十部学校御着御昼食午後二時小俣学校御着生徒下等上等二舎御試験午後五時退校御泊宿大川繁右エ門」と、両名の行動経過が詳細に記されている。ただ五十部学校や小俣学校に「御着」とあるのみで徒歩だったのか人力車での移動だったかは不明である。ただし翌一一日は「午前八時過御發駕境野学校御巡回同校迚足立氏拙者周旋方三人御送生徒試験相済・・・」とあり、一四日も「午前九時前御發籠渋垂学校エ御立寄御検査アリ　同十二時加子学校御着御検査アリ　終テ梁田宿上総屋彦平宅御弁當同午後二時御發籠天明町へ御越ニナル」と、「御發駕」との表記がある。「發駕」には「駕籠で出発」、「貴人が出発する」等の意味があるが、人力車での出発を敬意で表現したのであろう。途中「渋垂学校エ御立寄」、「加子学校御着」等も一連の人力車での移動であったと思われる。五月二六日は「午前九時学務御掛原近知殿小俣学校へ臨視但し生徒休暇学区取締金谷九十郎殿武藤道齋子随従セリ原君午後一時過足利町へ向御発車明廿七日御帰縣之よし金武両氏御發車後各〻帰宅ス」とある。原公が小俣学校へ「臨視」のあと「足利町へ向御発車」とあれば人力車での移動が明確である。

なお駕籠は明治に入るとほとんど駆逐されたが、半兵衛の明治一一年六月二一日の日誌に、栃木県権参事柳川安尚が巡回中、急病に罹り「柳川病者ヲ人力屋〻駕籠ニ而引取山木や奥へ臥ス」とあり、三日後の二四日「柳川安尚氏駕籠ニて発途吹上へ帰ル」との記述がある。また明治一八年七月一一日の日誌に「雇人仁太郎病患重症ニ付駕籠ニ而濁沼実家へ護送ス」とあり、病人等を安静に運搬するのに駕籠が使用されることがあった。

二．学区取締会議等で栃木町の師範学校へ人力車で往来

明治六年の日誌では、県官の出役の場合を除いて半兵衛らの移動手段についてはほとんど記されていなかったが、明治七年の日誌（『学務雑誌』）になると、例えば五月一九日「午前十時足立氏同伴乗車　栃木行　午後四時栃木着尤モ車夫ノ力ナリ」と、半兵衛が栃木に赴くのに学区取締足立至徳と人力車に「同伴乗車」して移動したことが明記され、かつ「尤モ車夫ノ力ナリ」とも記されている。そして所用を終えて二三日の帰途も「足利町迚足立同道帰宅」とある。当然人力車に同乗しての帰行である。

明治八年以降の日誌は、日記スタイルとなり、私生活を含めたその日の出来事が記録されており、各地に赴いた際も「乗車」等、人力車利用がわかる

表記が増える。栃木町での学区取締会議への参加に関しても、例えば明治八年六月五日は「午前五時□六十度出縣乗車午後二時栃木町着」と出発時刻と到着時刻が記されている。翌六日の学区取締会議を終えて翌七日は「午前七時乗車栃木發正午十二時足利町着午後三時過扱所へ立寄川嶋貞面會同六時帰宅ス」と帰宅までの途中の行程が時刻とともに明記されている。七月五日も「午前五時發車午後一時三十分栃木着」、翌六日「栃木師範学校會議出頭ス」、そして八日「午前七時栃木出車午後四時足利支店へ着終日雨降一泊ス足立氏同車」と足立氏と人力車に同乗、出発時刻、到着時刻、天候等も記されている。一〇月五日も「午前六時□五十五度同八時出車足立氏宅へ立寄同伴午後三時三十分栃木着ス」とあり、翌六、七日の両日は会議、そして八日は「午後三時足立氏同道出車犬伏泊午前六時発車」と足立氏と人力車に同乗して帰途に立ち、途中、犬伏で一泊し、翌朝午前六時に発車、九日の日誌に「午前九時足利着ス」と記されている。

明治九年の日誌においても、二月五日「午前八時出發午後五時栃木町大和屋着」、翌六日は「栃木師範校ニオイテ学区取締會議ス」。そして会議を終えて八日は「足立氏同道足利町迠帰町ス夜九時帰村」と出発と帰宅の時刻が記されている。さらに三月一五日の日誌になると、「午前八時映晴出車足利支店へ立寄車夫与惣二犬伏宿三桝屋茶漬夫〆車乗替出車冨田宿松本氏宅へ立寄山士家氏居合同道栃木〒へ着ス午後四時三十分過ナリ」とかなり詳細に記述されている。すなわち車夫与総二の人力車で午前八時に出発、途中犬伏宿三桝屋で茶漬を食し、そこで人力車を乗り換え、冨田宿で松本氏宅に立ち寄り、居合わせた学区取締山士家左偈が同乗、午後四時半に定宿の栃木〒（志鳥半兵衛宿）に到着している。会議は一七日から三一日まで開催、その間、二五～七日は安生順四郎が営む牧場、発光路にも足を伸ばしている。そして三一日は閉会式終了後、「正午十二時過足立氏同道栃木町出車午後五時過足利町店へ安着ス支店へ泊ス」とある。六月一九日も「午前四時支店〆出車同八時栃木金半方へ着ス」と朝八時に栃木に到着、直ちに県庁に赴き「縣令公〆御直達莫太ノ御賞典下賜感銘之至不堪」と記している。そして「正十二時栃木出車大雨中泥土甚シ漸足利町へ午後六時後安着ス」と、帰路は「大雨中泥土甚シ」と道路状況が記されている。その夜は足利に宿泊、翌二〇日「足利出車午前十時帰宅ス」。八月六日は「午後七時過夕刻出車足利支店へ行同夜泊ス」と夜、足利支店に行き宿泊、翌七日「午前三時ニ起四時前支店出車栃木行午前七時三十分着ス同八時出廳ス」と、午前八時の登庁に間に合うよう午前四時前に足利支店を出発している。そして県庁では「各学校へ即時寄附致候ニ付其賞トシテ銀盃二個木盃一個拝戴ス」。続けて「同日午後三時出車同九時夜ニ入足利支店へ帰宅ス」と足利支店に戻っている。そして翌八日は足利支店で勤務し「午後九時三十分帰車ス」と夜遅く人力車で小俣に帰宅している。一〇月九日も「午前八時出車出縣ス足利町へ立寄渡邊大属殿ニ巴屋ニて拝謁ス直に出車午後四時安着ス」。以後数日間、栃木師範学校で会議があり、同月二〇日「午後三時終會同六時栃木出車足立同道冨田宿松本利七方ニ泊ス」と足立と人力車に同乗帰途につき、途中冨田松本宅で一泊。翌二一日「午前六時冨田宿出車午前十一時足利へ着ス午後三時後帰宅ス」とある。一二月一九日も「午前十時過出車栃木へ出張午後五時過着ス大和屋半兵衛ナリ」と栃木に赴き、二一日に会議を終え「午前十一時過栃木出車足立同道午後六時前足利支店へ着ス同夜該店へ泊ス」と足利支店に宿泊。そして翌二二日「午前十時出車帰宅ス」と小俣に帰宅している。

明治一〇年の日誌においても、一月三一日「午前八時出車午後二時半〒着ス」。翌二月一日は礼服を着用、栃木師範学校において開業式が挙行される。そして翌二日「午前七時出車正午十二時足利支店へ帰町」。その夜は足利支店に宿泊、翌三日「午前七時足利出車小又帰宅ス」。二月二二日も「午前八時栃木行午後三時大和屋へ着」。翌二三日は午前五時に県庁に「西京博覧會出品持参ス」。所用を終えて翌二四日「午前七時出発午後一時足利支店へ着ス」。その夜は足利支店に宿泊、翌二五日「午前十一時過足利より帰村ス」。三月二六日も「午前七時発足出縣ス足利町〆乗車・・・午後四時栃木大和屋へ着ス」。前夜は足利町に宿泊したので「足利町〆乗車」とある。翌二七日は県庁において小学補助金等を受領し「午後二時過出車西風強シ佐野町前後

ニテ猛烈風午後七時頃足利支店へ安着ス」とある。佐野町辺りで猛烈風だった。その夜は足利支店に宿泊、翌二八日は早朝に足立至徳と医師の渡邊道甫を尋ね、「午前十一時獨歩午後一時帰宅」と、足利町から徒歩で帰宅している。八月五日も「午前四時三十分足利支店出車犬伏三桝屋ニ而朝飯ヲ食ス九時栃木町大和屋へ着ス」。今回は県令宅を訪れ、県令より銀行設立の件を相談される。そして八日「午前四時三十分栃木出車同十時足利支店へ着ス松田学校試験足立氏へ依頼午後六時帰宅」と、松田学校の進級試験担当を足立氏に依頼している。この時、半兵衛は銀行の設立に向けて尽力すべく学区取締を辞する意思を固めたようである。早速、翌九日「午前四時三十分出車　車夫五郎べ　同十時栃木着」と栃木に赴き、翌一〇日に学区取締免職願書を提出、翌一一日「午前四時三十分栃木町出車午前十時足利支店へ着ス」。そして足利町で川島長十郎、相場朋厚らと食事懇談をし「午後九時帰宅ス」。学区取締を辞して、以後、第四十一国立銀行の設立に尽力すべく相談をしたものと思われる。そして八月一九日「午前五時出車（与三）午前十時四十分栃木大半着ス」。「大半」とは定宿、大和屋半兵衛の略記である。そして県令はじめ県の要人等とも面談、第四十一国立銀行設立の件で打診、依頼があり、直後より銀行設立の発起人や株主等、協力者を募るべく栃木県内各地を奔走することとなる。その模様については項を改めて述べることとし、次に学区取締の任務として担当の足利・梁田両郡を中心とする各学校等の巡回の模様について考察することにする。

三．進級試験実施等で学区内各学校等を巡回…人力車および徒歩で移動

明治初年は近代学校制度の草創期であり、学校の設立に向けて寄付金の徴収、学校開校、教師の養成と派出、そして各学校における進級試験の実施等が学区取締の大きな任務であった。「学制」期の学校制度は下等小学（四年）、上等小学（四年）の四―四制で、半年（六カ月）ごとの進級試験に及第して進級する仕組みであった。明治七年には試験制度もかなり整備され、管内各学校で進級試験が原則春秋二回実施されるようになった。試験の種類は、進級試験のほか月例試験（小試験）や学校卒業時の試験（大試験）等があり、特に大試験には県令や県の学務掛など県官が臨む場合が多かった。進級試験の実施に際し、学区取締は担当学区内各学校の級別受験予定者数を把握し、県に報告するとともに、各学校を巡回して進級試験を実施（担当）することも主要な任務であった。半兵衛の日誌には、各年における進級試験の実施状況に関する記録もみられる。(八) 例えば明治七年九月二二日の日誌（『学務雑誌』）に「足利学校下等第八級試験ヲ致ス学務御掛原少属殿御出役　木村　足立　臨席ス」とある。足利（町）小学校の下等八級の進級試験の実施に際し、県から学務掛原近智が出役、学区取締の木村と足立も臨席、以降「同　廿七日ニ至終ル　八級生徒百六十九人　内八名落第」と級ごとの受験者数、落第者数が記されている。同年一〇月二日から四日までは小俣小学校で進級試験を実施、日誌に「十月二日晴ヨリ四日至小俣学校生徒第八級三十九人第七級三十人内三名落第」と記されている。このように明治七年の日誌は、進級試験に関して実施日、実施学校名、級別受験者数、落第者数等が簡潔に記されているのみである。

しかし明治八年の日誌になると、各学校間の移動等も含め進級試験実施についての、より詳細な状況が記されるようになる。例えば三月二七日の日誌には「午前八時出發足利町足利学校大試験御出役渡邊権大属殿臨視午後一時出席ス同五時過引揚御旅宿巴屋仁兵衛方同七時今福村より乗車帰宅ス夜午後八時五十分」と試験実施にかかる一日の行動が時系列に沿って記されている。すなわちこの日は「足利学校」（足利町小学校）での大試験（卒業試験）が実施され、県から学事掛渡辺邁が出役、半兵衛も午前八時に（人力車で）自宅を出発、試験に立ち会い午後五時に試験終了、渡邊氏は旅宿巴屋に引き上げ、半兵衛は「七時今福村より乗車帰宅」した。四月一〇日は「大督業浅野道二殿足立氏足利町より五十部学校へ午前八時御着同校生徒八級6五級迚七十六人試験同夜岡田平三郎宅泊ス足立氏午後五時帰町ス」とある。すなわち五十部学校での進級試験に際し、県より大督業浅野道二が出役、終了後、浅野氏と半兵衛は地元五十部村の岡田宅に宿泊、足立は帰町している。

翌一一日も五十部学校で試験実施、正午過ぎ「五十部学校出發小又村へ午後二時着浅野氏同道山木桜へ逗留」と小俣村に移動。翌一二日から一四日までは小俣学校で進級試験。一四日午前中に小俣学校での試験を終え、「午後三時松田学校へ出役」。翌一五日は松田学校で進級試験、終了後「午後六時過板倉村近藤久八郎宅へ越ス」と板倉村の近藤宅に移動、宿泊。翌日以降、板倉学校、葉鹿学校で試験を実施。一九日午前に葉鹿学校での試験を終え、「午後三時過田嶋村学校へ越午後四時過着」と田嶋村学校に移動する。二四日は名草学校で試験終了後、「午後二時過大月村学校へ越ス午後四時より生徒廿四人八級試験ス」とあるように、各学校間の移動に関しては「越（ス）」、「罷越」、「巡校」、「立寄」等の表記がみられる。移動手段は不明であるが、距離がかなり離れていない限りは徒歩での移動であったと思われる。足利町の中心部から田島村、名草村と大月村の間は、やや距離はあるが徒歩での移動も不可能ではない。五月七日は「午後三時副戸長阿部氏石直拙三人桐生町へ出車ス」と三名、桐生町まで人力車で赴き、「縣令公原近智君従者一人午後五時過桐生学校慈恩寺へ御着・・・小生阿部両人令公ニ拝謁ス」と、県令、県学務掛原近智氏らの到着を出迎えている。そして翌八日は「縣令公小又学校御着原近知殿随従ス夫〻生徒一舎毎ニ授業臨視アリ午後六時後大川繁右衛門宅へ御越御泊」と小俣学校の授業を臨視。翌九日は「午前八時前大川宅御出發葉鹿学校へ御立寄夫〻乗車　小生随従三車ニ而松田学校臨視」とある。すなわち県令と原公は宿所の大川宅から葉鹿学校に立ち寄り、「夫〻乗車」、半兵衛らも随従、人力車「三車ニ而」松田学校を視察している。「乗車」と明記されていれば人力車での移動が明確であるが、それ以外の移動は徒歩だったと思われる。同日は松田学校を視察後、「同村金井孫七宅御弁當夫〻板倉学校御立寄五十部学校臨視午後四時過山越月谷学校へ臨校午後七時過同村馬場半七宅へ御泊」と、昼食をはさんで松田、板倉、五十部、月谷の四校も巡回視察されている。日誌には「御立寄」、「臨視」、「山越」等とあるが徒歩での移動だったと思われる。特に五十部学校から月谷学校へは「山越」とあり、峻険な山道で人力車での走行は不可能だったと思われる。翌一〇日は「午前六時後御出發山川学校御立寄夫〻乗車小生随従天明町迠護送ス・・・」とある。宿所を出発後、山川学校に「御立寄」、「夫〻乗車」とあるから宿所から山川学校までは徒歩で同校から人力車に乗車、半兵衛も「随従天明町迠護送ス」とある。天明町は佐野の犬伏近くで山川学校からはかなりの距離である。五月一五日は「一小区上羽根田村学校開校出役学務係原弘三君御出役午前十一時相済夫〻御同行七小区山下村へ御越寺岡村〻乗車岡嶋忠助方御用宿午後二時着ス」と、上羽根田村学校の開校式に県学務係原弘三が出役、その後、七小区の山下村に赴くのに「寺岡村〻乗車」とある。七月二七日は「午前七時桐生町へ発車桐生区扱所へ立寄佐羽吉太郎氏同伴安楽土学校へ出張生徒　六級　五級　試験ス・・・夜ニ入乗車帰宅ス」と半兵衛が桐生町の安楽土学校の進級試験に学区取締佐羽と共に臨んでいる。桐生町への往復は「発車」、「乗車」とあるから人力車である。桐生町は旧舘林県下の山田・邑楽・新田の上野三郡のなかの山田郡にあり、明治九年八月に群馬県に編入、明治一〇年一二月に学区改定がなされるが、それまでは半兵衛の担当学区内であった。九月四日は足利学校（足利町小学校）の新築現場および共励舎等を視察、「夫〻午後三時引揚足利町へ帰ル途中大雨風アリ午後六時帰宅雨益〻甚シ着衣大いニ湿タリ単歩苦心セリ」と雨の中を徒歩で帰宅したため着衣がずぶぬれになったと記している。九月二七日は「午前八時小又村坂部君僕乗車直ニ安楽土学校へ出役」と、県の学事係坂部教宜と人力車に同乗し安楽土学校に出役、一〇月三日まで同校の試験を実施、翌四日「午前八時安楽土村出發乗車同九時帰宅ス」と人力車で帰宅している。一〇月二〇日は「午前八時乗車出張五十部学校大試験学事係小杉虚東殿御出役同夜生ハ金井氏宅へ泊ス」と五十部学校での「大試験」（卒業試験）に学事掛小杉虚東も出役、半兵衛はその夜は地元の学区周旋人金井方に宿泊、翌二一日は同校での試験を午後五時に終了、その後「小杉氏足利町へ引揚生直ニ乗車帰宅ス午後六時過ナリ」とある。

明治九年は、四月一六日「足利学校會議各校教頭廿一名足立木村出席ス」と足利小学校で教員会議が開催され、「午後四時退散ス和洋舎ニオイテ馳

走ニ成夜午後十二時過乗車川上氏同道帰宅ス」とある。会議には学区取締の木村と足立が出席、終了後和洋舎で馳走になり、夜遅く小俣小学校教頭（校長）川上広樹と人力車に同乗し帰宅している。その翌一七日は「午前十時小又学校へ巡回夫〆葉鹿学校へ巡回午後一時帰宅」。地元の小俣学校と葉鹿学校なので徒歩での「巡回」と思われる。翌一八日は「午前八時粟谷学校巡回ス夫〆松田学校へ巡回…夫〆板倉学校巡回午後三時帰宅」と午前から午後にかけて三つの学校を「巡回」している。移動手段は明記されていないので不明であるが、恐らく徒歩での移動であろう。五月四日は小俣学校での試験で「出役奥山氏午前九時入車校査試験ス」と県から奥山氏が出役「入車」している。小俣学校での試験は九日午前まで続き、「午前十一時〆葉鹿学校試験午後五時過済奥山氏足利へ行小生も小又へ一先帰宅」するが、半兵衛は「夫〆足利足立宅へ罷出杉野へ面話試験方法其外督学局巡回ノ手順談示ス」とその後も足利町に赴き任務を行い、同日「夜十二時足利〆小生帰車ス」と真夜中に帰宅している。翌一〇も葉鹿学校で試験、翌一一日「葉鹿学校生徒試験午前十時済夫〆松田学校へ出張ス」と葉鹿学校での試験を終えて松田学校に移動するが、山道でもあり、「行路甚暖氣汗衣ニ徹ス松田学校十二時前着午喫飯ス試験午後六時止ム学校へ泊ス」と着衣も汗で濡れたとあるから、徒歩での移動であろう。約二時間を要し、正午十二時に松田学校に到着している。五月一九日は「午前十一時過督学局辻君本課渡邊君武藤道齋氏福居町ヨリ人力車ニ而大雨中着同校（注…梁田学校）試験視業ス午飯イタシ正十二時後館林へ辻君渡邊君両君出車雨甚シ」と梁田学校での試験に県督学局の辻氏と課長渡辺氏等三名が「人力車ニ而大雨中着」とある。また終了後は「館林へ辻君渡邊君両君出車」とある。県官の出役の場合は人力車利用が明記されているケースが多い。五月二七日は「午前正六時〆福居学校試験ス午前十一時終業直ニ八幡村へ罷越立教舎生徒試験午後七度終業永倉政平氏宅へ泊ス」。福居学校から八幡村へは「罷越」とあるが、近距離なので徒歩であろう。翌二八日は「午前七時〆八幡学校試験ス午後三時終業夫〆乗車出發同四時寺岡村山本へ着ス」とある。すなわち八幡学校での試験を終えて「夫〆乗車」とあるから人力車で寺岡村に向かっている。八幡村から佐野に隣接する寺岡村まではかなりの距離である。六月一一日は「午前七時出車足利学校會議へ出頭ス同夜支店へ泊」と会議で足利町に「出車」している。同夜は足利支店に宿泊、翌一二日「午後二時川上氏同伴帰宅ス」と、小俣学校教頭（校長）の川上広樹と同伴帰宅している。一〇月二九日も「午前七時足利学校へ出會ス　二十　二十一　二分区各校教員惣集會試験日限談示ス午後二時退校午後九時夜入帰宅ス」と、足利小学校での教員会議に出席、人力車での往来であろう。一二月八日は「粟谷学校試業済午前十一時過山越松田学校へ着ス午後一時〆八七級及六級試業ス」と進級試験。粟谷学校から松田学校へは「山越」とあり、峻険な山道を徒歩での移動であったと思われる。

明治一〇年は一月一四日「午前九時出車足利学校ニオイテ各校教員集會ス午後二時過一同退散…午後八時車引帰宅」と足利小学校での教員会議に出張、人力車で往復している。四月二六日は「午前八時過足利町区務所へ出頭ス…足利〆乗車帰村午後二時ナリ」。五月一〇日も「午前九時福居町区務所へ出車渋垂学校合併談示寺山氏出縣同日夫〆八幡村学校へ出頭永倉氏宅ニおゐて学校改正之義談判ス午後四時過帰車ス」と学事上の諸問題で区務所に出向いている。六月七日は「午前四時出車梁田宿立正舎へ大試業に出張ス」。すなわち立正舎での大試業（卒業試験）のため出車、「副区長　小島信好　訓導星野氏　生三名立會試業ス」。「生」とは半兵衛が自分のことを表記したものである。翌八日は県官坂部教宣氏が合流、翌九日「午前九時雨中坂部氏同道乗車梁田宿出発福居町学校其外ニ付区務所へ出張ス」。六月一二日は「午前五時乗車五十部学校試験立會…」。午後六時試験終了後は地元の学区周旋人川島長十郎宅に宿泊。翌一三日は「午前六時五十部村発シ湯澤深稲村常吉生山越板倉村へ出ル」と教員ら三人で「山越」板倉村に向かうが、「山路霧深クシテ甚困却故ニ衣ハ腰より下濡レサル處ナシ山路剣岨ナリ漸ニシテ午前八時板倉学校へ三人共着ス」とある。険しい山道で、霧も深く腰から下は着衣も濡れたとあるから徒歩での移動であろう。約二時間を要し午前八時に板倉学校に到着している。七月二日は「学務課増淵瀧一郎氏出役足利

町へ泊ス朝八時小又学校へ着車」と県官増淵氏が出役、宿泊地の足利町から小俣学校まで人力車で移動、到着し、小俣、葉鹿、立正舎の下等小学一級生徒の「諸科温習試験ス」。すなわち三つの学校の最上級生（一級生）の卒業試験を実施、増淵氏は翌三日「早天帰縣ス」、すなわち栃木町に帰っている。

以上、半兵衛の担当学区内の各学校における進級試験や会議、所用等での移動について考察してきた。県官の出張の場合は人力車での移動が明記されている場合が多いが、半兵衛らの場合は、移動手段が明記されていないことが多く、近距離の場合や峻険な山道等では徒歩での移動であったと思われる。なお試験終了後は大抵、地元の学区周旋人宅に宿泊しており、同一学校での試験が数日間続いたり、他学校に移動する場合も近距離の場合が多かったと思われる。

ところで半兵衛は明治一〇年に学区取締を辞任、それと前後して第四十一国立銀行の設立に尽力するようになる。そして銀行設立後は栃木本行との往来、そして日常的には銀行足利支店への通勤となる。

第二章　第四十一国立銀行の設立と栃木本行、足利支店との往来

一．明治一〇年八～九月、銀行設立に向けて栃木県内各地を奔走

木村半兵衛は明治六年三月に学区取締に任命後、学区取締としての任務に精励するが、明治九年九月二七日の日誌に「同（注、午前八時）三十分過栃木町　加藤弁蔵氏来車國立銀行設立發起ニ付出張」と栃木町から加藤弁蔵が国立銀行設立の件で訪れる。そして三日後の九月三〇日「午前七時出車栃木行午後三時大和屋へ着大悪路ナリ」と悪路の中を栃木町まで行き、翌一〇月一日、鍋島幹県令に参謁、「國立銀行ノ義種〻御談話アリ」と国立銀行の件が持ちかけられる。そして翌二日は「午前六時栃木發車午後一時足利へ着ス同七時帰宅ス」。明治一〇年夏頃からは銀行設立の件が具体的に浮上する。明治一〇年七月二二日の日誌に「午後四時頃栃木町より鈴木要三氏國立銀行設立之義ニ付縣令并白石氏内命ヲ以協議談判ニ来臨ス」と、鈴木要三が銀行設立に係る県令の内命をもって半兵衛の許を訪れる。そして八月四日「午後八時出車足利支店へ泊ス」、そして翌五日「午前四時三十分足利支店出車犬伏三桝屋ニ而朝飯ヲ食ス九時栃木町大和屋へ着ス」と早朝に足利支店より出車、栃木町に赴き定宿の大和屋に到着、「夫〻直ニ鍋島県令宅へ伺アヤニク留住白石氏ヲ訪ヒ・・」と、鍋島県令宅を訪問するが不在。翌六日、庁舎に出向いた後、午後三時に「縣令公宅へ出頭ス白石君同席銀行事件熟談数時間」と銀行設立の件で県令等と熟談数時間に及ぶ。翌八日「午前四時三十分栃木出車同十時足利支店へ着ス松田学校試験足立氏へ依頼午後六時帰宅ス」と一旦帰宅、そして翌九日「午前四時三十分出車　車夫五郎平　同十時栃木着」、数人と面会「免職云々ノ義懇話ス」。半兵衛も学区取締を辞任して銀行設立に全力で取り組む決意を固めたのであろう、翌一〇日には「学区取締免職願書差出ス茂木紀行氏へ托ス」と「学区取締免職願書」を提出し、翌一一日「午前四時三十分栃木町出車午前十時前足利支店へ着ス」。足利支店到着後、和洋舎で川島長十郎らと面会、学区取締を辞職したことも報告したであろう、そして「午後九時帰宅ス」。そして八月一九日、再度栃木町に赴き銀行役員となる鈴木要三、中島喜代次等と面会、「夫〻令公宅へ推参銀行一條種〻熟談数刻ニ及ヒ午後七時過帰宅ス」。翌二〇日も鈴木、中島両氏らと「銀行創立云々議ス」。翌二一日も協議を重ね、以後、銀行設立に向けて発起人や株主等、協力者を募るべく栃木県内各地を奔走することとなる。

早速翌八月二二日「午前七時過〻鈴木氏同車壬生町へ出張該事務所へ立寄銀行云々判示ス該士族ハ大半加入之由」と鈴木要三と人力車に同乗、壬生町に赴き該地の士族たちに銀行設立への協力を訴え、「大半加入之由」とある。八月三一日は「午後二時足利区務所へ出頭ス銀行発起人依頼　柳田　萩野　松村　阿由葉　四名ニ面接懇談ス」と地元の足利地域を巡回、四人と面接懇談している。九月三日は「午前五時出車佐野町堀田理一郎氏宅へ銀行発起人談示ニ推参ス老人ニ直接懇談数時間ナリ理財達知ノ人物速ニ同盟ス」と佐野町の堀田理一郎氏に発起人を依頼、了承を得る。九月一一日は「午前六時両人出車宇都宮行・・瀧澤喜平次氏面會直ニ三人区務所へ出頭区長森安氏へ面談数刻銀行ノ義依頼ス」と宇都宮に赴き、区務所において区長森安氏

に面談、銀行設立の協力を依頼する。翌一二日は「朝午前七時宇都宮出発・・・鈴木　瀧澤　余三名乗車喜連川へ出張」と喜連川に赴き、区務所において区長、副区長に面談「銀行事件依頼ス」。その夜は釜屋に投宿するが、「副区長浅沼氏並士族惣代ノ者四名同道宿へ来リ銀行云々談示ス各了承シテ帰ル」と、副区長はじめ士族惣代四名が宿所を訪れ銀行の件を談示し了承を得る。翌一三日は「午前六時釜屋出車大田原宿へ午前十一時着」と大田原に赴き、区務所に於いて区長はじめ数人に面会、「午後二時大田原宿星野氏ゟ乗車三人黒羽根へ出張ス午後四時ナリ中屋ト云フ旅舎ニ投ス」と黒羽根に赴く。そして区務所に出張し副区長に面会。「夜ニ入黒羽根士族　矢野　高柳両氏入来銀行云々談示ス」と黒羽根の士族二名に銀行の件を談示する。同日の欄外には「栃木ヨリ十八里　宇都宮士族古橋郷達氏ニ面會　大田原ヨリ黒羽へ二里道路悪シ」と途中の行程や道路状況も記されている。九月一五日は「午前七時　鈴木　瀧沢　余〆三人柏屋川岸ゟ荷物舟へ乗入烏山町へ出行川路凡七里余舟中無事外乗合三人アリ午前十一時同町叶屋ト唱旅店へ投宿」と柏屋河岸より船で烏山町へ移動、「川路凡七里余」とある。同地の旅宿に投宿し、午後一時過、該地の区務所に出張、「諸事懇談」。帰宿後「午後七時過烏山士族十四名副区長星野新造氏同席ス銀行設立云々数時間談示ス粗了承各位一同帰ル」と夜、宿所において副区長と該地の士族一四名に銀行設立への協力を依頼、「粗了承」を得ている。翌一六日は「午前六時瀧澤氏ニ分ル同氏狩野村へ帰宅鈴木両人裸馬送ヲ雇茂木町行行程五里余山路危険頗ル馬上ニオイテ冷汗雨ノ如シ漸午後一時過茂木町備前屋へ着ス」とある。すなわち早朝に瀧澤氏とは別れ、半兵衛と鈴木喜代次の二人は烏山から茂木町まで「行程五里余山路」を裸馬で移動する。「山路危険頗ル馬上ニオイテ冷汗雨ノ如シ」と記している。翌一七日は「午前八時茂木町備前屋出発鈴木氏　馬乗　黒瀬氏木村両人歩行　里三里半余　祖母ケ井村休三人乗車　道場宿村昼食ス　里二里半）道場ゟ乗車　二里半　宇都宮池上丸屋治平方へ泊ス午後四時ナリ」とある。すなわち鈴木氏は馬に乗り黒瀬氏と半兵衛は徒歩で移動、道場宿村からは三人共人力車に乗車、行程二里半で宇都宮の丸屋治平方（旅宿）に到着している。

このように八月下旬から九月下旬にかけて栃木県北を中心に広く巡回、ほとんど人力車での移動であったが、場所によって舟を利用したり山道等では馬での移動や徒歩で、かなりの強行軍であった。九月下旬以降は地元足利地方を中心に銀行設立の協力者を求めて巡回、そして九月二六日には「午前八時過足利支店出車　雨後悪路　弐人曳車寺岡迠大久保坂切下ノ廻道甚悪路ナリ漸午後三時栃木大和屋半平方へ着瀧澤喜平次供ニ同宿ス」と栃木まで赴き、翌二七日、安田氏支店に中島ら「一同集會大蔵省へ銀行創立願書相認メ上申ノ手順ナル」と、大蔵省に届ける銀行創立願書をまとめている。

二．第四十一国立銀行栃木本行への往来

（一）明治一一年九月に栃木本行、翌一〇月に足利支店の開業

明治一一年は第四十一国立銀行の開業に向けて栃木町には何度も出向いているが、道路泥濘で難渋することが多かった。五月二八日は「午前七時発車栃木行終日雨降富田宿ゟ雨甚シ午前十一時過大和屋へ着ス」と終日降雨が続くなか栃木に赴き、県学務課員白石磨氏宅を訪問、翌二九日は県令鍋島幹宅を訪れ談話数時間、帰路は「川長氏同伴午後三時過足利へ帰車道路泥濘尤も茂呂宿ハ深サ一尺余　大悪路其余所〻不宜輓夫ハ大困却ス和洋舎支店等へ立寄夕刻帰車午後八時過帰宅ス」と道路泥濘で「輓夫ハ大困却ス」と記している。特に茂呂宿（現在の鹿沼市）あたりは「深サ一尺余　大悪路」と記している。七月九日も栃木町に赴いているが、「午前八時出車（連日雨天大前山下両村泥濘頗甚シ五十部村ハ可也）足利支店へ立寄直ニ乗車（山川村鵜木大悪路）犬伏宿三桝屋ニオイテ昼飯午後一時過ナリ夫ゟ乗車午后五時過栃木平着（茂呂前後大悪路　終日不雨暑蒸ス）」と道中の様子が日誌に詳述されている。小俣を出発して近くの大前、山下両村も連日の雨で泥濘、山川村鵜木、茂呂前後も「大悪路」であった。栃木町で所用を終えて一二日の帰路も「雨降午前七時栃木出車犬伏ニ至雨止ム雷雨大悪路車夫弐人輓足利支店へ午前十一時過安着同夜泊ス」と雷雨による大悪路であった。

八月一三日は株主総会、役員選出、銀行開業に向けて出発。日誌に「午前四時出車足利支店へ立寄同九時過栃木着」。銀行において中島喜代次、瀧澤喜平次らとも面会。二日後の一五日「午前七時銀行へ出張ス株主總會ス」と株主総会が開催、その後、「発起人取締投票」が行われ「木村　正田　鈴木　瀧澤　中島　役員ト定ム」。すなわち木村半兵衛、正田章次郎、鈴木要三、瀧澤喜平次、中島喜代次の四名が役員に選出される。翌一六日は「大蔵省上申書類」等を取りまとめ、県令の捺印をもらい、「四時過瀧澤喜平次乗車夜通し出京ス該書持参」と瀧澤喜平次が上申書類を携えて夜通し人力車で走行、上京する。二四日は県庁官吏等による「銀行募集金検査」がおこなわれ、九月五日の日誌に「東京安田氏ゟ銀行開業免状昨四日御下附到達ス」とあるように、前日の四日には創業者安田善二郎氏のもとに銀行開業免状が到着する。そして九月八日に銀行開業となる。当日の日誌に「第四十一国立銀行開店ス東京ヨリ安田善二郎氏来臨ス」とある。さらに翌月一〇月一日には「第四十一國立銀行足利支店開業國旗ヲ揚祝ス本日株主足利最寄一同ヲ招待ス」と、同行足利支店も開業となる。当日は国旗を掲揚し、足利最寄りの株主一同も招待され盛大に開業式が挙行される。

銀行開業後も栃木本行に赴いている。一〇月二五日「午前五時三十分足利支店出車ス道路泥濘漸午前十一時栃木着」と道路泥濘であった。二九日の帰路も「午前十時過栃木銀行鑑定方竹内安次郎同伴出車足利銀行支店へ午後二時漸着路中大悪路…午後五時頃出車帰宅ス」と「路中大悪路」と記されている。一一月二三日にも栃木に赴いている。日誌に「午前九時出発佐野正田氏へ訪ヒ道路大泥土車行漸ニシテ午後一時着同夜ハ正田氏へ泊ス」とある。その夜は佐野の正田宅に宿泊、翌二四日「午前九時正田氏暇乞犬伏三舛屋ゟ乗車午十二時栃木銀行へ帰ル」。栃木本行での要件を終えて二六日帰途につく。日誌に「午前九時出車足利支店猿田小泉等へ立寄午後六時帰宅」とある。翌年以降も、年二回の株主総会をはじめ銀行用で栃木本行には度々赴いているが道中は積雪や降雨等による道路泥濘等で難渋している。

（二）株主総会や行用等でしばしば栃木本行へ往来――道路泥濘で難渋

毎年一月と七月に株主総会が行われているが、明治一二年は一月一六日の株主総会に向けて一月五日に出発、日誌に「午前九時出車足利支店及佐野正田氏へ立寄後五時過栃木銀行へ着ス」とある。以後数日間、栃木本行に勤務、一月一六日に「第四十一國立銀行株主総會及昨十一年下半季利益金配當致ス」と株主総会が挙行される。翌一七日は、県令はじめ大勢の来賓列席のもと「本行開業式」が挙行、「終而株主一同へ祝酒ヲ出ス大宴會」と盛大な祝宴が催されている。栃木本行での一連の行事が終わり二一日帰途につく。日誌に「午前六時出車足利支店へ立寄午後四時帰宅ス　車夫東吉」とある。道路状況に特に問題はなく走行は順調だったようで、往復とも出発時刻と到着時刻のみが記されている。その後も何度も銀行用で栃木本行に赴いているが、道路泥濘等、人力車での走行に難渋したケースのみあげていく。

一一月には銀行役員の中島喜代次と鈴木要三の自宅を訪れている。すなわち一一月八日「午前六時出車栃木銀行へ午後壱時着午後二時半鈴木氏同伴乗車油田村中島宅へ推参ス同五時過同夜馳走ニナリ泊ス」と、鈴木要三と共に油田村の中島喜代次宅を訪れ馳走になっている。同日の日誌に「栃木ゟ里程油田村へ凡五里」と栃木町から油田村まで「凡五里」と記されている。翌九日は「午前十時鈴木共ニ中島氏宅暇ヲ乞中島氏三人同伴単歩奈良部村鈴木宅へ推参午十二時ナリ同家ニ而馳走同夜泊ス」と、次に中島氏と共に奈良部村の鈴木宅を「単歩」すなわち徒歩で訪れている。同日の日誌に「油田ゟ奈良部村迚一り半」とあり、かなりの距離ではあるが徒歩で赴いている。その夜は鈴木宅に宿泊、翌一〇日は「午前六時過中島鈴木余三車雨中路線泥濘車走ラス甚困却ス九時過漸〻銀行へ着ス」と、三人が人力車「三車」にそれぞれ分乗し栃木本行まで行くが、「雨中路線泥濘車走ラス甚困却ス」とあり、降雨による道路泥濘で走行も難渋したようである。その夜は栃木本行に宿泊。翌一一日、半兵衛は足利支店に向かうが、「午前九時栃木本行出車ス到ル處道路泥濘車夫頗ル苦シム特ニ犬伏宿及佐野甚し漸午後三時過足利銀行支店へ到着」とある。すなわち途中、特に犬伏、佐野辺りは道路泥濘がひ

どく、約六時間後の午後三時過ぎにようやく足利支店に到着している。

一二月八日も栃木本行に出向いているが、当日の日誌に「午前正六時乗車　五郎平　車　犬伏迠　正田氏へ立寄午飯酒食馳走章二郎君供犬伏三枡屋ゟ馬車ニ乗シ午后四時三十分大和屋半平へ着」とあるように、犬伏三枡屋からは馬車を利用している。当時栃木県内でも馬車が普及しつつあった。

以後も毎年、一月と七月の株主総会をはじめ様々な銀行用で栃木本行に出向いているが、特に二～三月の積雪時、六月の梅雨時、九月の暴風雨の時期は道路泥濘がひどく走行に難渋している。以下、年次ごとにみていく。

明治一三年は、三月八日「雨降午前七時半出車（車夫　五郎平）足利銀行へ立寄直ニ乗車到ル處道路泥濘甚困却ス…漸クニシテ午後三時半栃木町平へ到着ス」と、道路泥濘でかなり時間を要している。所用を終えて一〇日の帰路は「午前七時半正田氏共に出車正午足利銀行へ着勤務午后七時帰宅ス」と順調だったようである。六月二日も「午前七時前出車栃行足利銀行へ立寄直乗車午後三時半栃木銀行へ着道路泥濘甚困却ニ不堪故ニ遅〻延着」と往時も道路泥濘で困却、到着までかなり時間を要しており、翌三日の帰路も「午前十時過栃木銀行出車午后三時過足利銀行着道路泥濘又〻四時頃小雨直ニ止ム午後七時出車帰宅」とある。七月四日も株主総会の開催に向けて栃木行。日誌に「午前七時四十分足利支店出車　車夫　竹　道路尤も泥濘佐野正田氏へ立寄午飯馳走ニナリ夫ゟ直ニ乗車栃木銀行へ午後四時過着」と途中経過も詳しく記されている。九月六日も「午前六時半足利支店出車道路泥濘甚困却ス漸ニシテ午後一時栃木本行へ着」とある。道路泥濘で困却、到着までかなりの時間を要している。帰路は翌七日「午前九時栃木本店出車途中佐野銀行へ立寄午后四時足利支店へ着同夜典舗へ泊ス」そして翌八日「午前五時典舗出車帰宅ス」と順調だったようである。

明治一四年は一月九日に株主総会に向けて六日に出発、「午前八時足利支店出車車夫竹　佐野正田氏へ立寄年禮ス直乗車午後一時前橡木銀行へ着」、九日に株主総会、一〇日には新年宴会がおこなわれ、翌一一日の帰途は「風甚シ車道砂烟実ニ困苦ニ不堪候午後一時過足利銀行へ帰着ス」と烈風により「車道砂烟実ニ困苦ニ不堪」と記している。明治八年の日誌にも「一月八日より二月十八日ニ至無雨故ニ日〻烈風多ク塵土ヲ飛散旅客大ニ困却セリ」とあり、例年一～二月は雨が少なく、道路が乾燥し烈風により塵土が飛散することも少なくなかったようである。四月六日は「夜半頃ゟ降雪午前八時出車雪霏〻タリ午後三時漸ニシテ橡木銀行へ到着」と前夜からの降雪で「雪霏〻」、すなわち雪雨が入り乱れて激しく降るなかを走行、栃木本行到着も遅延して午後三時になった。七月八日は一〇日の株主総会に向けて出発、日誌に「午前六時出車　五郎平　久蔵　足利支店へ立寄直ニ橡木本行へ出頭ス午十二時ナリ道路泥濘」とある。八月二日も「午前七時出車足利銀行へ立寄夫ゟ栃木本行へ出發風雨道路泥濘甚困却漸〻午后二時過栃木へ着」と風雨と道路泥濘で困却、到着まで長時間要している。九月一九日も栃木本行に赴き、二〇日の帰路は「午前九時過出車路中悪路午後一時足利銀行へ着ス雨益強午后七時出車八時過帰宅雨甚シ」と降雨で悪路のなか帰宅している。九月二八日も銀行検査のため栃木本行に赴き、三〇日の帰路は「午後二時曇天栃木本行出車弐人輓車道路甚泥濘困却言語ニ盡セス漸ニシテ五時半足利支店へ到着夜ニ入小又へ帰宅九時過ナリ悪路尤も甚し雨降強シ」と道路泥濘の悪路で「言語ニ盡セス」と記している。特に九月は昔から「二百十日」、「二百廿日」等と称される暴風雨の時期で道路泥濘がひどかった。

明治一五年は七月九日の株主総会に向けて六日、小雨のなかを午前六時に出車、途中「正田氏へ立寄夫ゟ二人挽仂車ニ乗シ道路甚泥濘正午十二時栃木銀行へ着ス」とある。株主総会を終えて一一日の帰路も「前九時三十分雨止發車道路泥濘弐人挽車困苦ス午後二時足利銀行へ安着ス」。翌一二日「午前八時足利銀行へ出勤後三時過退社四時半過帰宅道路泥濘甚シ」と銀行勤務を終え帰宅も「道路泥濘甚シ」という状況であった。九月二五日にも栃木本行に赴いている。当日の日誌に「前六時出車　輓夫五郎平　足利銀行へ立寄夫　栃木銀行へ午後二時三十分到着」と到着まで長時間要しているが、「本日足利ゟ栃木ニ着　道路大泥濘困却ス」と記している。

三．日常的には銀行足利支店への通勤

（一）降雨、降雪等による道路泥濘や強風に困惑

半兵衛は、栃木本行にもしばしば赴いているが、日常的には銀行足利支店への勤務であった。小俣からの通勤は大抵人力車で、日誌には「出車」、「發車」、「乗車帰宅ス」、「帰宅ス車行」、「帰車」等と記されている。なかには単に「帰宅」等と記されていて移動手段が不詳の場合もある。なお足利典舗に宿泊する日も多く、その翌日は「出勤」と記されている。最寄りの銀行へ徒歩での出勤だったであろう。栃木本行との往来では道路泥濘が極めて多かったが、足利支店への通勤はさほどでもなく、走行も順調な日が多かったが、時期により雪雨による道路泥濘や烈風、雷鳴等に困却することもあった。

年次順にみていくと、明治一一年の日誌では一一月六日「午前八時出車又〻雨降終日不止大悪路漸十二時前足利支店へ着」とある。降雨による大悪路で出勤に四時間近く要している。一二月二日は「午前九時獨歩足利銀行支店へ出勤」と、出勤は徒歩だが、「午十二時過ゟ風出増甚し烈風午後四時帰車旅人ヲ吹倒ノ勢ナリ」と昼過ぎより風が強くなり、人力車での帰路は強風で「旅人ヲ吹倒ノ勢」に危険性も感じたようである。

明治一二年二月七日は「午前八時三十分出車足利支店銀行へ出勤ス午後六時帰車ス」と往復とも人力車を利用、それぞれの発車時刻が記されている。大抵は人力車を利用しているが、三月二二日は「午前八時過獨歩足利銀行支店へ出張午後五時過帰宅単歩」と往復とも徒歩であった。行きか帰りかいずれか徒歩という日もあった。七月二九日は、勤務の帰途かはわからないが「午後五時半乗車帰宅路中雨降強シ」と強雨のなかを帰宅している。八月二三日も「余モ五時過乗車四時過ゟ雨ハラ〳〵降帰路山下村ニ入ゟ雷雨傾盆暴雨甚シ雷威増盛真ニ恐怖ニ不堪」と帰路、雷鳴と豪雨に恐怖を感じたようである。途中、大前村の茶屋で休憩、やや小降りになり、「乗車帰宅単物ハ濡レ水泳ノ如クナル」と人力車に乗車していても水泳をしたように着物が雨でずぶ濡れになったようである。九月五日は銀行勤務後「午後七時頃ゟ夕立大雨雷鳴アリ八時頃至聊小雨ニナル依テ出車帰宅ス夜九時過ナリ」と大雨が小降りになるのを待って帰宅、家に着いたのが夜九時であった。一〇月二〇日も「大雨不止午後五時過至止西風午後七時過乗車帰宅ス」と帰宅時に大雨で、雨が止むのを待ち午後七時過ぎに帰宅している。なお通勤ではないが、三月五日所用で出向いた先の植木野村からの帰路、「雨降不己至處泥濘甚し車夫ノ困却ハ勿論乗車殆ト危険ナリ」と道路泥濘で危険を感じている。

明治一三年は、三月二〇日「午前七時乗車銀行へ出勤西風追〻甚シク」と、出勤時に西風が激しくなり、人力車での走行も大変だったと思われる。その日の日中は「非常ノ大猛風所〻損所アリ」と記されている。三月三一日も「夜中ゟ雨降終日不止強雨ナリ銀行出勤ス」と前夜からの強雨のなかを出勤、帰路も「午后五時雨中有風帰車ス」と風雨の中を帰車している。三月は「春一番」というか強風の季節であった。また梅雨時の六月三〇日は「午後六時過退行ス雨益甚シ乗車帰宅ス」。七月一五日は「道路泥濘午前六時出車足利銀行へ出勤」と道路泥濘のなかを出勤している。

明治一四年は一月二〇日、「午前七時出車道路氷土岩石ノ如ク甚困却漸九時足利支店へ到着」と厳寒で道路が凍結状態の中を人力車で出勤している。二日後の一月二二日の勤務後の帰路は「午後四時乗車弐人挽キ雪後道路大泥濘真ニ困却不堪加フルニ西風甚シ」と融雪後の道路大泥濘と強風の中を帰宅、「真ニ困却不堪」と記している。三月一一日は「雪降午前九時過ゟ雨ニナリ道路泥濘甚シ例刻前銀行へ出勤」と雪雨で道路泥濘のなか人力車で出勤している。三月二一日も銀行出勤後、「午后四時過雨雪ヲ冒シ乗車帰宅ス道路泥濘甚困却」と記している。三月は強風の日が多く、三月二五日は「午後九時帰車風益甚シ寒氣モ凛烈ナリ」と強風と寒気のなか夜遅く帰宅している。三月三〇日も「午前七時出車足利銀行へ出勤ス西風益強シ路中土砂吹立黒烟甚シ午後六時帰宅ス」と強い西風で道路の土が黒煙にように吹き荒れるなかを帰宅している。春は融雪で道路の土が肌を出し、土砂が強風で黒煙のように舞い上がることも多かった。また九月は暴風雨の時期で、道路泥濘の日が多かった。九月一〇日は「午後八時帰宅雨降甚し泥濘悪路」。明記はされていないが人力車での帰宅であろう。九月二三日も「夜八時過帰車道

路泥濘輓夫甚困却ス」と道路泥濘のなか夜遅く人力車で帰宅している。九月二七日は「六時出車道路泥濘甚シ八時前銀行へ出勤」と記されている。なお木村家では家族の罹病も多く、足利町に渡邊道圃医師に定期来診を依頼していたが、一〇月一四日は半兵衛が銀行勤務中に具合が悪くなり、「余不快渡邊道圃氏ニ診断ヲ受ル薬用イタス午後四時過帰宅ス」とあり、一一月一〇日も銀行出勤後、「午前十一時頃〻又〻隔痛追〻強ク午後三時後〻五時頃迄甚し渡邊道圃氏ヲ招キ治療同夜支店へ泊ス夜十二時頃ニ至漸〻イタミ治ス」と渡辺医師に往診を依頼している。一一月二八日は栃木本行に赴くが、日誌に「午前八時三十分出車　久蔵　足利銀行へ立寄直に乗車午後四時過栃木本行へ着鈴木中島出勤ス余銀行へ泊余車行故心下不宜　カウレンアリ」と人力車での長時間の走行で「心下不宜」、痙攣もあったと記している。持病の「心下痛」が悪化、同年末から東京で半年間の闘病生活を送ることになる。

半年間の闘病生活を終えて半兵衛は明治一五年五月下旬に帰郷、六月一杯は四萬温泉で湯治生活、七月から勤務に復帰する。七月三〇日は「前六時□八十四度足利銀行へ一寸出車直ニ帰宅ス余病症同事少シク痛ヲ發ス然し食事如常」と、病み上がりで体調が優れず早退した日もあったが、あとは通常通りの勤務で八月二五日は「銀行営業多忙午後六時後帰宅ス」と営業多忙で帰宅時間が遅くなることもあった。九月は暴風雨の時期で「午後五時帰宅ス道路大悪泥濘車夫共ニ困却ス」（九月一九日）、「午後七時過帰車道路大悪泥土困却ス雨益降」（九月三〇日）と道路泥濘で困却する日が多かった。

（二）徒歩での通勤も少なくなかった

銀行足利支店への通勤は、大抵は人力車であったが、徒歩で通勤する日もあった。例えば明治一一年は「雨降午前十時三十分獨歩足利支店へ出張ス」（五月一六日）、「午前八時過足利支店へ獨歩出張ス」（六月二六日）、「午前七時カス川氏余両人獨歩足利支店行」（八月四日）、「午前九時獨歩足利銀行支店へ出勤」（一二月二日）など「獨歩」と記されている。

明治一二年も三月二二日は「午前八時過獨歩足利銀行支店へ出張午後五時帰宅単歩ス」と徒歩で往復している。三月二九日は「午前六時過出発単歩前八時足利銀行着」と徒歩で出勤。徒歩だと約二時間要するため早朝の午前六時に出発している。七月一七日は「午後五時半獨歩帰宅ス」と徒歩で帰宅し、その翌一八日は「午前六時前出発獨歩足利銀行支店へ出勤」と徒歩で出勤、ただし「午後五時三十分帰車ス」と帰路は人力車を利用している。八月三〇日も「午前四時獨歩足利銀行へ出張ス」と午前四時の早朝に徒歩で出勤、早朝は涼しかったであろうが、日中は猛暑で「□九十度残炎ノ甚シキ可恐〻〻」と日誌に記している。その夜は支店に宿泊、翌三一日「午前六時足利支店出車帰宅ス」と早朝に人力車で帰宅している。

明治一三年も三月一五日は「春色充分午前七時獨歩足利銀行へ在勤午後六時獨歩帰宅」と往復とも徒歩で通勤している。春で気候も良かったこともあろう。三月二三日は「小雨午前六時獨歩同八時足利支店着九時前銀行へ出勤ス」と小雨の中を徒歩で出勤している。ここで「足利支店」とは木村商店で、そこに立ち寄った後、銀行に出勤している。八月一〇日は「終日雨降時ニ甚シキ大暴雨降アリ午前六時獨身足利銀行へ出勤午後六時過帰車ス」と大暴雨のなかを「獨身」すなわち徒歩で出勤、帰りは人力車を利用している。一一月二二日は「午後四時単身獨歩帰宅ス」と徒歩で帰宅している。

明治一四年も一月一五日は「午前七時獨歩九時足利銀行へ出勤午后七時獨歩帰宅」と徒歩で往復している。一月二五日は「午前七時獨歩足利銀行へ出勤夜ニ入午後九時帰車風益甚シ」と出勤のみ徒歩。一月三一日は「寒氣強シ午前七時獨歩足利銀行へ出勤午後七時単歩帰宅」と往復とも徒歩。二月三日も「午前七時半単歩足利銀行へ出勤午後二時過退行獨歩帰宅ス」。二月一五日は人力車で出勤、「午後六時前獨歩帰宅ス」と帰路は徒歩である。雪道は人力車の走行も困難だったこともあろうか。春色が濃くなった四月一〇日も「午前六時獨歩足利銀行へ出勤午後九時帰車」と出勤は徒歩、帰宅は人力車を利用している。明治一五年は半年間の東京での療養生活を終え、七月から勤務しているが、病み上がりもあってか徒歩での通勤はほとんどない。

このように銀行足利支店への通勤は、大抵は人力車であったが、往復ない

し片道の徒歩通勤も少なくなかった。小俣から足利町までは決して短い距離ではないが、一体なぜ徒歩も多かったのであろうか。道路状況や天候等もあったかも知れないが、最大の理由は健康への留意だったと思われる。明治九年八月二四日の日誌に「午前五時□七十弐三度　足利へ出張終日和洋舎滞留午後十時帰宅ス往復トモ獨歩運動可ナリ」との記述がある。足利まで徒歩で往復しているが、徒歩運動は健康にも良いと考えていたようである。

以上、第一章では半兵衛の学区取締としての活動、第二章では銀行勤務に関する移動手段について考察してきたが、次章では木村家の私生活面における足利町や遠隔地との往来について考察することにする。

第三章　木村家の私生活面における足利町および遠隔地との往来

一．家族の診療や医師（渡辺道圃）の往診による足利町との往来

明治八年以降の半兵衛の日誌には、木村家の私生活に関する記録も多い。まず家族の病気罹患により診療に赴いたり、医師の往診等で足利町との往来が多いが、その際の移動手段は当然人力車であり、日誌にもそのことが明記されている。年次順にみていくと、明治八年六月一五日「とよ指腫物出来人力車ニテ足利町渡邊先生へ胗察ヲ乞」、六月二〇日「せい流行眼真吾眼疾甚シ足利町渡部氏へ治療乞ニ乗車遣ス」、六月三〇日「とよ眼病足利町出車治療行」と足利町の眼科専門の渡辺道圃医師に診療に出向いている。八月三日は「渡邊道圃氏来車患者　志む眼病　良造時候病　林七　忠三郎　暑冒四名アリ」と渡辺医師が木村家に往診に訪れている。八月一六日は「良蔵時候冒症ニ付母君同車足利渡邊氏方へ治療ヲ乞出車ス」と三男良蔵（三）の急病で母が良蔵を連れて渡辺医師のところに人力車で駆けつけている。八月二〇日は「まさ咳氣症鼻下赤色タヾレ　先六月頃ゟかつ人力車ニ乗し足利渡邊氏へ治療ヲ乞ニ出張スきく随従ス」と四女まさの診療で母ときくが付き添って足利に滞在したようである。一〇月一〇日は「同（注、午後）六時過渡邊道圃氏来車一泊ス△まさ病症不安大患ナラス」と渡邊医師がまさの往診で訪れ一泊している。一一月二三日は「良三寒冒不快ニ付老母附添人車ニ乗し足利渡邊氏宅へ診察ヲ乞　午前十時出車午後三時帰宅」と良三が感冒に罹り、老母が付き添い日帰りで渡辺医師に診療に赴いている。その翌二四日は「良三不宣足利町渡邊氏ヲ招キ診察ヲ乞同氏午後七時来車良三咳氣屡〻アリ徹夜碌〻不寝重症ナリ」と渡辺医師が往診に訪れている。良三はかなりの重症で、その後も一進一退を繰り返し、二八日に容体が悪化、「良三病症難シ渡邊氏午後三時来車良三追〻重症同夜中苦痛咳氣甚シ渡邊氏泊ス」と渡辺医師が泊りがけで診療にあたるが、翌二九日「午後十時終ニ良三病死ス本月四年七月」と診療の甲斐なく、弱冠四歳七ヶ月で死去する。

明治九年は一月一二日「午後四時渡邊道圃氏来車大川政衛後家長病ニ付診察ヲ乞」。このように渡辺医師の往診が極めて多いが、一月二七日には毎月二、一二、二二日の三日午後一時より「竪員渡部道圃氏ヲ招待シテ患者ノ有無ニ不拘毎月三度宛定日之通診察スル┐ヲ約束ス」と渡邊医師と定期往診の契約を交わしている。そして早速二月二日「午後六時渡邊道圃氏約束診察ニ来闔家一同診察ヲ乞同夜泊ス翌三日午前十時帰町ス」と渡辺医師が「約束診察」で泊りがけで来診している。二月一二日も定期往診で「午後三時渡邊氏診察ニ来ル同六時帰宅ス」。二月二二日は「午前九時足利町出張相場氏渡邊氏面謁ス午後四時乗車帰宅ス」と半兵衛が足利町に出張、和洋舎の相場朋厚と渡辺医師に面謁している。二月二七日は「正午過渡邊道圃氏診察来臨之レハ廿二日約束不参ニ付日操越来ルナリ」と二二日の定期来診に来なかった代替として来診している。四月三日も「渡邊道圃氏診察来車ス」。五月二日も「渡邊道圃氏診察入車」。六月二日は「午後二時頃渡邊道圃氏来臨闔家診察ス外来患者七人診察薬ヲ乞午後八時過帰町ス往復乗車ナリ」と渡辺医師が来診、木村家の家族と外来患者七人を診察、調薬している。八月二日「渡邊氏診察来車夜十時頃帰車ス」。八月一〇日は「午前六時敬三乗車足利行痳疾診察ヲ渡邊氏ニ乞」。八月二二日「午後三時渡邊氏入来同五時過帰車ス」。九月一二日「渡邊氏診察来車夜九時帰車雨降甚し」と定期往診。一〇月八日は「午前八時敬三聊咳漱ニ付乗車足利渡邊氏へ診察ヲ乞直ニ帰宅心配ナシ」と敬三の診療。一一月八日は「△まさ冒寒熱甚し午後一時過熱ノたメ引付ル

直ニ治ス足利渡邊氏午後五時過来車まさ格別ノ┐ナシ同夜よく寝入渡邊氏泊ス」と渡辺医師が四女まさの往診で訪れ一泊している。一一月一二日「足利渡邊氏診察来車」、一一月二二日「渡邊氏来診」は定期往診である。一一月二七日にはまさが寒感で高熱を発し、「葉鹿近藤氏来診夜午後十一時渡邊氏来車同夜泊ス」と最寄りの葉鹿村の近藤隆甫医師が来診、夜遅く渡辺医師も来診、宿泊する。翌二八日、まさは快方に向かい「渡邊氏九時頃帰宅ス」。一二月二七日も「足利渡邊氏定診入来」とある。

明治一〇年、渡辺医師は「田部井」と改姓になるが、一月一七日「午後五時頃ゟ田部井道圃氏診察ニ来ル」。四月一二日「足利ゟ田部井道圃氏来臨」。四月一六日は明十郎が腹痛で「田部井道圃氏来診ス」。五月二日「道圃氏入診ス」。五月一一日はまさが寒冒で発熱、葉鹿村の近藤医師が診療にあたるが、一三日「午後二時前渡邊道圃氏来車診察ス同氏眼病煩労ノ由午後五時過帰宅」と渡辺医師も来診している。「眼病煩労」とあるが、渡辺医師は眼科医が専門で、診療の際に患者の病原菌により片目の視力を失ったと言われている。五月二〇日は「午後五時頃田部井道圃氏ヲ招キ明十郎咳氣診察ヲ乞格別ノ┐ナシ同氏保証ス午後八時帰車ス」と明十郎の診療に訪れており、二日後の二二日も「田部井道圃氏例診ニ来車ス」と定期往診で訪れている。七月一七日は「田部井道圃氏来診ス午前八時過午前十一時帰車ス」。八月二日は「田部井道圃氏来診ス患者ナシ」。一〇月二日も「雨中田部井道圃氏診察ニ入車ス患者更ニナシ」と田部井医師が定期往診で訪れているが患者がいないこともあった。一〇月二七日は「大工寅吉肺病之症大患ニ付田部井道圃氏ヲ招キ診察ヲ乞母モ寒冒（リョウマチ）病ノよし手當ス」と大工寅吉の肺病と母の寒冒の診療で訪れている。一一月二日も「田部井道圃氏来診ス大工寅吉宅へ来診ス」。大工寅吉は木村家出入りの大工だったが、一一月二八日の日誌に「大工寅吉病死年三十六甚痛哭ニ不堪也」とあり、診療の甲斐なく弱冠三六歳で死去する。一二月四日は老母の腹痛、「直ニ鈴木節三氏ヲ招キ診察ヲ乞種〻手當尽力ス十二時頃ニ至漸ク腹痛止ミイヒキヲシテ眠ル」と最寄りの鈴木節（折）三医師に往診を依頼、快方に向かうが、その後「足利町ゟ渡邊道圃氏モ十二時過来車診断」と渡辺（田部井）医師も往診に訪れている。同月一二日「田部井氏来診ス」とは定期往診である。

明治一一年も二月二二日「田部井道圃来診」、五月一二日「午後二時渡邊道圃氏来診ス」は定期往診である。五月二一日は明十郎が便秘になり、翌二三日「田部井道圃氏来診明十大便不通カンテウヲ差込暫時ニシテ大便多分通ス氣分よし」と田部井道圃が来診、手当している。八月二日「渡邊道圃氏来診ス」は定期往診である。明治一二年二月四日は「まさ聊寒冒咳氣アリ渡邊道圃氏ヲ招キ診察ヲ請二日分薬用手當ナシ直ニ帰宅ス」とまさが寒冒に罹り渡辺医師が診療に訪れ、薬用手当をしている。同年八月二日「渡邊道圃氏来診ス」は定期診療である。明治一三年も八月に四女まさの具合が悪くなり、一一日の日誌に「鈴木氏精〻ス夜九時過渡邊道甫氏来診泊ス鈴木氏共〻徹夜尽力ス」と鈴木折三医師が治療に尽力するが、夜九時過ぎに渡辺医師も駆けつけ、二人で協力して診療にあたっている。明治一四年も七月二〇日、四女まさが具合が悪化、「醫員足利渡邊氏来診鈴木共薬法談示ス」と渡辺医師と鈴木折三医師二人で協力して診療にあたっている。

二．宴会、商店用、知人宅訪問、行楽等での足利町との往来

また半兵衛の日誌には宴会や商店用、知人宅訪問、行楽等の記録もみられる。明治九年一月一一日は足利町で教員連が「午後四時頃ニ至祝酒宴ヲ開ク午後七時衆一同退散木村乗車帰宅ス」と宴会終了後、半兵衛は人力車で帰宅している。一月一六日は「午前十時過足利へ乗車出張足立氏宅罷出同午後三時過帰車夫与惣松」と足利町の足立至徳宅を訪問、人力車で往復している。同じ学区取締仲間として話もはずんだであろう。一月二三日夜は「渡邊氏相場氏小泉予支店ニオイテ一宴催ス同夜泊ス」と商店足利支店で半兵衛、渡辺医師、相場朋厚、小泉兵八郎ら四人で宴会、宿泊し翌二四日「午後一時足利町ゟ単歩帰宅ス」と徒歩で帰宅している。七月二九日は「午前六時足利へ出張ス足立氏へ面話相場小泉氏へ面話午後夜十一時過帰車ス」と足利町に出向き、足立、相場、小泉の各氏らと面話、夜遅く人力車で帰宅している。八

月二四日は「午前五時足利へ出張終日和洋舎滞留午後十時帰宅ス往復トモ獨歩運動ナリ」と往復とも徒歩で足利の和洋舎を訪れている。九月七日は「午前六時獨歩足利学校へ出張ス」と徒歩で足利学校を訪れ、翌八日「午前八時乗車足利ゟ帰宅ス」と人力車で帰宅している。一一月一九日は「植新菊花観場へ子供　とよ　志む　敬三　鏡〆五人人力車ニテ遣ス午後四時帰宅」と半兵衛の子どもら五人が菊花見物のため人力車で出かけており、二日後の二一日は「午前十時母せい　まさ　供きく歩行足利菊見物ニ行午後六時過母まさ帰宅」と家族ら四人が徒歩で足利町に菊見物に出かけている。

明治一〇年は二月一二日「午前九時出発獨歩足利支店へ出張同夜支店へ泊ス店用ナリ」と店用で足利支店に徒歩で赴き宿泊、翌一三日「午後四時過帰車ス」と人力車で帰宅している。二月二八日は「老母　とよ　しむ　敬三〆四人足利支店へ出車芝居見物ナリ」と家族四人が人力車で足利町に芝居見物に出かけている。三月二八日は「早朝足立氏道圃氏へ訪午前十一時過獨歩午後一時帰宅」と早朝に足立至徳と渡辺医師を尋ね、お昼前に徒歩で帰宅、二時間程要している。五月二四日も「午前九時過獨歩足利町へ出張ス和洋舎昼飯夜ニ入足立氏宅晩酒食ス同夜支店へ泊」と徒歩で足利町の和洋舎を訪れ、夜は足立宅を訪れ馳走になっている。徒歩での行き来も多い。

明治一一年一月二七日は「午前九時　母　こと　両人無車合乗北猿田小泉老母方へ病氣見舞へ出ル…午後九時　母　こと　両人帰宅」と母とこと二人が人力車に相乗りして北猿田の小泉方に病気見舞いに訪れ、夜九時に帰宅している。二月二日は「午前九時過獨歩足利行廣瀬氏小杉氏和洋舎支店等へ年禮ス」と年礼のため徒歩で足利に赴いている。ただし「夜ニ入午後十時十五分帰車」と夜遅く人力車で帰宅している。三月二八日は「前九時五十部村川嶋長十郎氏宅へ訪ヒ夫ゟ草雲先生ノ居へ川嶋廣瀬同道訪馳走ニナル後七時車行帰宅ス」と、五十部村の川島長十郎宅を訪れ、川島と広瀬同道で草雲先生宅を訪れ馳走になり、人力車で帰宅している。四月五日は「雨降前九時過猿田ゟ獨歩足立氏へ立寄夫ゟ和洋舎ニおいて酒肴馳走ニ成同夜ニ支店へ今宗兵衛氏供〻同泊ス」。前夜は足利の猿田村の小泉宅に宿泊、翌五日に徒歩で足立宅、和洋舎を訪れ馳走になっている。夜は東京から来ていた今宗兵衛と共に支店に宿泊、翌六日は「午前十時頃ゟ晴静今宗兵衛氏相場氏小兵氏同道白石山房へ訪ヒ酒肴馳走ニナル後四時半過ゟ草雲老人相場氏今キ宗氏四人連散歩小又へ同夜宅へ泊ス」と四人で草雲氏の白石山房を訪れ馳走になり、その後「四人連散歩」、小俣の半兵衛宅に行き全員宿泊している。五月一六日は「午前雨降十時三十分獨歩足利支店へ出張ス同夜泊ス」と雨の中、徒歩で足利支店（木村商店）に行き宿泊している。六月二六日も「午前八時過足利支店へ獨歩出張ス夫ゟ和洋舎行午後二時頃ゟ雨降同夜支店へ泊ス」と徒歩で足利支店、和洋舎に行き支店に宿泊。翌二七日「午前六時乗車帰宅ス」。七月二七日は「午前六時出車□九十度足利支店行同午後九時帰宅」と足利支店へ人力車で赴き、午後九時帰宅、恐らく人力車であろう。八月四日は「午前七時カス川氏　余　両人獨歩足利支店行」と糟川氏と二人徒歩で足利支店に行き、「糟川宗造氏ハ支店へ泊　余　和二郎ヲ連　両人午後五時獨歩帰宅ス」と糟川宗造氏は支店に宿泊、半兵衛は和次郎を連れて徒歩で帰宅している。九月二八日は「午前十一時出車足利町支店出張…同五時乗車帰宅ス」と人力車で足利支店を往復している。一一月六日も「午前八時過出車又〻雨降終日不止大悪路漸十二時前足利支店へ着夫ゟ和洋舎へ出張…同夜支店へ泊ス」と悪路のなか人力車で足利支店、和洋舎に赴き、支店に宿泊。翌七日は「午前八時足利支店弐人挽車へ乗正十二時漸帰行ス」と二人挽で帰宅している。一一月二六日は「午前九時出車足利支店猿田小泉等へ立寄午後六時帰宅」。人力車で出発、足利支店、猿田の小泉宅を訪れている。

明治一二年三月一三日は「午前十時母まさ足利町へ遊山へ出車ス」と母とまさが足利町に遊山で人力車で出かけており、一一月一三日には「午前九時母及まさ（車兵蔵）足利大日へ参詣ニ行午後六時過帰宅」と母とまさが車夫兵蔵の人力車で足利の大日（鑁阿寺）に日帰りで参詣に出かけている。

明治一三年一月一九日は「午后五時乗車川嶋長十郎氏宅へ罷出草雲先生同席種〻馳走ニナル同十時過退席足利支店へ泊ス」と夕刻から人力車で五十部村の川嶋長十郎宅を訪れ画聖田崎草雲も同席、馳走になっている。二月一

四日は「母ハ午前七時乗車足利松本宗貞氏宅へ年始歳暮而罷ル」と母が足利の松本宗貞宅に歳暮を兼ねた年始挨拶に人力車が出向いている。松本宗（操）貞は弘化三年、上州邑楽郡生まれ、五歳の時、痘瘡で視力を失う。一〇歳で江戸に出て本所の鍼灸の塾で箏曲、三弦、鍼術を学ぶ。明治初年足利に来て箏曲、三弦、和歌を業とした。木村家の宴席にもよく招かれている。二月二八日には「午後一時出車五十部村岡平祝義禮ニ出張（車夫　上下兵蔵）午后五時帰宅」と半兵衛が五十部村の岡田平兵衛宅の祝儀に人力車で出向いている。五月二三日は「午十二時出車猿田小泉新座敷落成ニ付招カル同席長四郎三相場朋厚岡田平三郎等ナリ馳走ニナリ…十時出車十二時帰宅」と猿田村の小泉宅の新座敷落成に招かれ馳走になり、夜遅く帰宅している。一二月一七日は「午前八時母足利支店へ手傳ニ出車」と母が足利の支店の手伝いに人力車で出かけている。

明治一四年三月三日は「午後二時退行直ニ猿田村へ獨歩年始ニ参ル小泉氏長四郎三氏問忠氏石喜等ナリ夜ニ入午後九時帰車ス」と銀行勤務後、徒歩で猿田村小泉宅に年始に赴き数人で祝宴、夜遅く人力車で帰宅している。一〇月一一日は「四時退行夫〻白石山房へ訪ヒ緩〻間話夜八時帰車ス典舗へ泊ス」と銀行勤務後、草雲の白石山房を訪れしばし歓談、店舗に人力車で戻り宿泊している。結構、勤務後に知人宅を訪問、歓談している。

明治一五年一〇月一〇日は「前七時出車足利草雲老人白石山房へ訪ヒ直ニ銀行へ出勤午後六時退行典舗ニ而相場小泉両氏共酒宴夜ニ入九時半帰車ス」と出勤前に草雲の白石山房を尋ね、勤務終了後は典舗で相場、小泉両氏と酒宴、夜九時半、人力車で帰宅している。一〇月二一日は「午前かつ足利町へ仕立御用向ニ付五郎平輓車往復ス」とかつが仕立て用で足利に人力車で往復している。一二月四日は「午前八時母及まさ〇酒店はま足利町へ出車竹澤藤治見物午後夜入八時帰宅ス」と母、まさ、酒店のはな三人が人力車で足利町に竹沢藤治見物に出かけている。竹澤藤治は数代伝わる独楽の名人。当時、浅草奥山で曲独楽や軽業の興業を行っており、半兵衛は上京した折に観覧しているが、地方でも興行していたのであろう。このように勤務以外に行楽やさまざまな所用、知人宅の訪問、酒宴等で足利町に出向くことも少なくなかった。

三．遠隔地への行楽、温泉場への湯治

半兵衛や家族らが行楽は足利町に限らず、遠隔地に赴いたり、温泉場に湯治に出向くことも少なくなかった。以下、年次ごとにみていく。

明治八年五月二二日は「午前七時かつ　せい　登代　志む　敬造　良造　まさ　差添半二郎婢きく　合九人太田金山新田神社参詣人力車三輛午後六時卅分帰宅」とある。家族らと木村家の従業員総勢九人が人力車三輛に分乗し、日帰りで太田金山、新田神社に参詣に出掛けている。八月六日は「午前六時□六十六度映晴勇蔵小泉兵八郎両人伊香保入湯出発ス」と早朝に勇三と小泉兵八郎が伊香保温泉に湯治に出発、半月後の同月二一日「午後七時過伊香保温泉より勇造小泉兵八郎氏帰宅ス」。

明治九年五月三日は「午前八時かつ　まさ〇本庄村ゑつ〇出半いし〇出太なを〇皆川みき都六人足利より供一人差添日光山へ参詣発途ス」と家族知人総計六人、足利から一人加わり日光山参詣に出発している。人力車に分乗しての出発であろう。八月二二日は「午前六時勇三鈴四郎両人伊香保温泉行」と勇三と鈴四郎二人で伊香保温泉に湯治で出かけ、三週間後の九月一三日「午後七時過伊香保ヨリ〇勇三鈴四郎半二郎三人帰宅」している。

明治一〇年四月二二日は「午前八時金山義貞公参拝（川上　別所　齋藤　守平　敬三　久保田　森山　和二郎　高常　余　廣四郎）十一人ナリ午四時帰宅ス」と半兵衛を含め総勢一一人、太田金山に日帰りで参詣に出掛けている。六月二二日も「午前九時緑町源三郎勇三供五郎〻三人太田金山新田神社へ参詣登山ス午後七時帰宅ス」と勇三ら三人で太田金山、新田神社に参詣、午後七時に帰宅している。いずれも移動手段は記されていないが、人力車に分乗しての参詣と思われる。

明治一一年二月一七日は「午前九時過敬三供猪平大原阿政新川貞助四人桐生町角力へ行」と敬三ら四人、桐生に相撲見物に出かけている。四月二一

日は「午前八時学校連　小里仁　山藤象之助　桜井佳十郎　久保田孝作　近藤弥平　星野氏　森山吉蔵　鈴木折三　木村半五郎　余　敬三　合十一人　太田金山義貞公神社へ参詣…午後五時一同無事帰宅ス」と半兵衛を含め学校関係者総勢一一名で太田金山新田神社に参詣している。人力車に分乗しての参詣であろう。また四月一〇日から三一日まで桐生天満宮で開帳がなされたが、四月一八日「敬三桐生町天満宮開帳へ遣ス」と敬三を天満宮開帳に送り出している。四月二三日は「桐生町開帳へ高橋大堂　文五郎　両人遣ス」。四月二五日は「母并ちよ鏡下女えい　小室おふき同小児下女都合七人桐生天満宮開帳へ遊行」と家族、従業員等総計七人が桐生天満宮開帳に「遊行」している。人力車に分乗したと思われる。七月二五日は「午前三時過　母　敬三　志満温泉行車夫　五郎平　兵蔵」と母と敬三が人力車二輌で四萬温泉に湯治に出掛けている。

明治一二年四月六日は「午前十時過に母　せい　とよ　しむ　合四人獨歩足利支店泊日光山参詣遊行ス宰料は廣瀬定兵衛氏」と家族四人で広瀬定兵衛を宰料（まとめ役）に日光に参詣すべく足利まで徒歩で行き支店に宿泊。翌七日「本日早天足利支店　母　せい　とよ　しむ　廣瀬定兵衛妻おのぶ都合六人立人力車ヲ以発途ス」と計六人、立人力車で日光に向け出発している。四月一九日は「午前九時過かつ明十郎皆川みき女両車産泰神社〻新川村へ参ル」と家族らが人力車二輌で前橋の産泰神社に参詣、その後新川に赴いている。六月六日は「午前六時発車川上先生　勇三　伊香保温泉行」と川上広樹と勇三が人力車で伊香保温泉に湯治に出発、同月三〇日「勇三川上氏伊香保〻無事帰宅スル」。八月二日は「午前二時三十分起同三時三十分過母　敬三　しむ合三人車夫兵蔵　五郎平外一人乗車四満温泉へ出發ス」と家族三人で人力車に分乗し四萬温泉に湯治に出かけている。そして三週間後の同月二三日の欄外に「廿三日四万ヨリ老母しむ敬三帰宅ス」とある。

明治一三年七月一四日は「午前六時勇三　とよ　伊香保温泉行カス川へ廻り鈴四郎誘込夫〻本庄内田せいヲ連レ都合四人にて温泉行」と勇三とよが糟川鈴四郎と本庄の内田せいを誘い都合四人で伊香保温泉に出かけている。そして三週間後の八月七日「午後六時過勇三　とよ　伊香保より帰宅ス」。勇三はよく伊香保温泉に湯治で出かけている。

明治一四年末から一五年五月まで半年間、半兵衛は東京で療養生活を送るが、療養を終えて五月末に帰郷した半兵衛は、六月には家族一同で四万温泉に湯治に出向いている。半兵衛も大病を経験して健康の大切さを痛感したのであろう、以後、毎年六月一杯は家族で四万温泉に湯治に出向いている。四萬へは六月二日に出発、日誌に「午前七時出發余かつ　まさ明十小泉しむ五人仂車四輌　五郎平　久蔵　甚之助　安二郎〻四人　朝新川村吉田氏へ立寄夫〻前はし田村や茶漬午後五時渋川宿青木へ泊ス」とある。家族五人で人力車四輌に分乗、出発、途中前橋で茶漬けを食し夕刻渋川宿到着、宿泊。翌三日は「午前五時半渋川宿青木發車小ノ子村坂路トンネル凡十五六軒夫〻村上村奇山如画市城村ノ經伊勢町及中ノ条町ニ至木村やニおいて午飯　中ノ条〻四万へ　四里半ト云フ山路駿嶮午後正六時無滞四萬関善氏へ安着」と四萬温泉到着までの途中の経過を詳細に記している。

四萬温泉には約三週間滞在し、帰途は六月二八日。「午前七時四満温泉余かつ　しむ　まさ　明十　都合五人仂車三輌出發〇平二馬一匹へ持荷附寄料ス道中無事後八時前橋桒町住吉屋國太郎へ旅宿ス」と家族五人、人力車三輌に分乗、荷物を馬に載せ前橋に午後八時到着、住吉屋に宿泊。翌二九日「午前六時三十分前橋出車道中無滞後三時帰宅ス」とある。

半兵衛の家族は翌一六年、翌々一七年も六月一杯、四萬温泉に湯治に赴いている。明治一〇年代当時は、人力車以外に交通手段はなかったが、明治三〇年頃になると道路も整備され、馬車も運行するようになったようである。四万温泉のパンフレット(九)に「明治三十年発行の『吾妻温泉記』（聚文館・山口通公）に「四万温泉は中之条より四里七町あるが、近来道路大いに開鑿され、容易に馬車・椀車を得鶴を得」とあるように、道路が整備され、四万の渓谷沿いに馬車が往来した。」と記されている。

明治一五年一一月一日は「午前九時過川上大人共ニ乗車桐生町共進會へ見物ニ行午後一時帰車ス」と半兵衛と川上広樹が桐生町に共進会見物に出

かけている。共進会とは農産物や工業製品等を陳列、公開し優劣を競う品評会で今回の桐生共進会では関東、東北地方の繭、生糸、織物の品評会が開かれた。一一月一一日には「午前六時晴静かつ　とく　明十共三人仂車二輛熱海へ出車」と家族ら三人が人力車二輛で熱海温泉に出掛けている。

四．上州（群馬県）糟川家、武州（埼玉県）本庄内田家への訪問

武州本庄の内田家は三代目半兵衛の生家で内田忠造は半兵衛の父である。日誌に「内田老翁」として登場する。三代目半兵衛は内田政七と称し、二代目半兵衛の長女かつと結婚していたが、明治二年二月二代目半兵衛の急逝により三代目を襲名したのである。そして三代目半兵衛の長女せいは内田家の全作（善作）に嫁いでおり、内田忠造の二女たせは上州の糟川家に嫁いでいた。したがって糟川家と内田家は深い親戚であり、半兵衛は次章で考察するように、上京の折には大抵、糟川家と内田家に立ち寄っているが、それ以外にも両家にはたびたび訪れている。以下、年次ごとに示す。

まず明治九年三月三日「午後一時乗車糟川村へ同三時後着　カス川氏へ同夜泊ス」と午後出車、糟川家を訪れ宿泊、翌四日「晴烈風午前十時カス川氏發境町萬屋へ出張ス午後三時乗車本庄宿へ着同夜内田氏泊」と本庄内田宅に到着する。翌五日は「午前十時墓参ス」と墓参を行い、酢屋吉三郎方で食品を購入、「午後二時頃ゟ本庄出車」、境町で知り合いの商店に宿泊。翌六日、商店改革について議し、「午後五時過出車糟川宅ニ着泊ス」。そして翌八日「午前十時カス川出車正十二時帰宅ス」と帰宅する。四月二五日は「午前十一時頃本庄ゟ母無事帰宅　内田老人客来」と母と共に内田老人（忠造）が半兵衛家を訪れている。内田老人も半兵衛宅をよく訪れている。そして二九日には大間〻にも一泊で出かけており、五月二日「午前七時三十分本庄老人乗車糟川へ帰行ス」と糟川家に向かっている。内田老人にとって木村家、糟川家は息子、娘の家でもあり、訪れることは楽しみでもあったと思われる。

明治一〇年一月二六日は「午前十時出車カス川へ立寄夫ゟ本庄内田氏へ類焼見舞ニ出張ス午後五時過着」と糟川家に立ち寄ったあと内田家に「類焼見舞」に訪れている。近隣の火災で内田家も類焼の被害があったようである。内田家には「同夜ゟ廿八日夜迚泊ス」。二八日には「本庄普請建築ノ談判ス」と家屋普請の件について相談、翌二九日帰行する。日誌に「午前六時晴静粕川宗造全作　余　三人出車カス川へ着ス」と三人で糟川に到着、「夫ゟ全作ハ小又へ直ニ帰ル余ハ大原阿部政二郎宅へ立寄植物場一覧ス午後四時過帰宅ス」と全作は小俣に直行するが、半兵衛は途中、寄り道して午後四時過ぎに帰宅している。五月四日は「午前七時母乗車糟川行午後六時帰宅ス」と母が日帰りで糟川家に赴いている。六月二七日も「午前五時出車カス川へ立寄糟川宗造氏ヲ誘行本庄宿へ出張午前十一時ナリ同夜泊ス」と糟川宗造氏を誘って本庄内田宅を訪問、翌二八日「午前六時出車同十一時帰宅ス」とあり内田家を訪問した目的や家族の様子等についての記述はない。

明治一一年二月一三日も「午前八時過乗車路次甚泥濘漸ク午後二時過糟川氏宅へ着同夜泊ス　車夫与惣二」と道路泥濘のなか車夫与惣二の人力車で糟川に到着、宿泊。翌一四日「前七時カス川出車同十一時本庄着　せいは直ニ乗車同日カス川泊翌日小又着スル」　車夫与惣二」と本庄に到着。せいは与惣二の帰り車で糟川、そして翌日は小俣に行くことになる。半兵衛は翌一五日「本庄内田氏へ泊ス」。翌一六日「午前四時起正六時出車弐人曳路次冰詰烈寒甚シ前十時三十分無事着ス」と道路が凍結状態のなか弐人曳で帰行。小俣到着まで約四時間半を要している。五月一〇日には「午十二時本庄老父并とよ同伴来車ス」と本庄老人（内田忠造）と半兵衛の二女とよが半兵衛宅を訪れている。本庄老人は一八日まで滞在し、一九日「午前九時過内田翁　糟川氏　乗車帰行スあやにく十時過西北風大雨風凡三十分間」と西北風と大雨の悪天候のなか内田翁と糟川氏は同乗、帰行する。

明治一二年二月五日「晴烈風午前九時粕川宗造氏同伴十一時頃カス川村安着ス同家へ年禮致し午後三時頃本庄へ出車烈風強し○安着ス午後四時ナリ」と糟川宗造と同伴で糟川家に年礼に赴き、午後三時に本庄に向かう。烈風のなか午後四時本庄内田家に無事到着。翌六日「午前十一時本庄出車（車夫五郎平）本庄内田両翁無事午後三時過無滞帰宅ス」と車夫五郎平の人力車

で約四時間で滞りなく小俣に帰宅、「内田両翁無事」と日誌に記している。五月二三日は「午正（ママ）十二時本庄老翁カス川宗氏来臨ス」と本庄老翁と糟川宗造氏が来臨、本庄老翁は翌月も滞在していたようで、六月一四日「午前八時本庄老翁足利支店へ出車（兵蔵輓夫）」と足利支店にも出向いており、六月二八日に「午前七時本庄内田老翁機嫌克乗車糟川迫帰ル」と糟川まで上機嫌で帰行している。九月一八日も「午前六時三十分兵蔵車ニ乗りカス川へ一寸立寄夫〻午後一時本庄へ着内田氏へ泊ス」と車夫兵蔵の人力車で出車、糟川家に一寸、立ち寄り本庄内田宅に到着。翌一九日「午前七時半本庄内田氏出車境町萬屋店ニ立寄夫〻大原本町村加藤氏及阿部氏へ寄直ニ帰宅ス午後四時ナリ」と途中、何軒か立ち寄りしながら小俣に帰宅する。

明治一三年は二月二二日「午前九時乗車十二時過粕川氏へ年始トシテ立寄午飯酒肴馳走ニナリ午後三時過乗車本庄宿へ出車途上西北風甚シ漸ニシテ六時前内田氏へ着」と糟川家を年始挨拶で訪問、昼食、酒肴を馳走になり、本庄内田家に行く。途中「西北風甚シ」とある。翌二三日「本庄驛滞留　内田本家　戸谷氏　日向　酢屋　等へ年始イタス同夜泊ス」と内田家はじめ近隣に年始挨拶、その夜は内田家に宿泊。翌二四日「午前八時出車十二時過帰宅ス（車夫　兵蔵）」と車夫兵蔵の人力車で帰宅している。同年四月は上京の帰路に、また七月も上京の際、往路と帰路に内田家に立ち寄り宿泊しているが、家族の様子についての記述はない。一〇月二九日は「午前八時老母及まさ　しむ三人乗車粕川泊本庄宿へ参ル」と半兵衛の家族三人が粕川家を訪れ宿泊後、本庄に向かっている。内田家を訪れ数日間滞在したのであろう、一一月六日「午後一時四十分老母及しむ　まさ帰宅ス本庄老翁来車」と家族らと一緒に内田老翁も半兵衛宅を訪れている。老翁は半兵衛宅にしばらく滞在、一二月一日の日誌の欄外に「一日本庄老翁カス川迫帰宅」とある。

明治一四年も四月一二日、上京の折に糟川家と内田家に立ち寄っている。八月二五日も上京の折に内田家に立ち寄っており、「内田老翁健全老母眼疾」と日誌に記している。九月一六日は粕川鈴四郎が死去、翌一七日「粕川村〻凶報到達」、翌一八日「午前五時半かつ単車（五郎平）粕川へ不孝見舞ニ出張スかつ午後六時帰宅」とかつが車夫五郎平の人力車で糟川家にお見舞いに往復している。一〇月一五日は「正午十二時頃内田老翁来臨ス」と内田老翁が来臨、老翁は数日間滞在、一九日に「本庄内田老人大間〻町〻新川村へ出車帰路カス川へ廻帰宅ノよし」と糟川家等に立ち寄り帰宅している。

明治一五年は九月八日、日誌に「前六時出車粕川氏へ立寄同家無事酒肴馳走ニナル緩〻談話休息午後三時乗車本庄内田氏へ後五時着老翁微熱格別ノ事ナシ外一同無事」とある。すなわち糟川家を訪れ酒肴馳走になり、夕刻に本庄内田家に到着、「老翁微熱格別ノ事ナシ外一同無事」と家族の様子について記している。そして翌九日「午前六時乗車本庄内田氏ヲ發ス正午十二時過帰宅」、帰宅に六時間以上要している。一二月一七日も「前八時過緑町重吉車出發粕川氏へ立寄午飯馳走三時半本庄宿へ無事着」と上京の折、本庄内田家に立ち寄り、「内田老翁持病ノ氣味不出来老母持病不宜全作せい両人看護ス」と記している。老翁、老母とも持病が発症し、全作とせいが看病と健康が心配な状態だったようである。なお糟川家、内田家は明治一六年以降も上京の折など訪れているが、一六年以降については稿を改める。

次に半兵衛や家族、木村商店の従業員、銀行員、知人等、頻繁に上京しているが、東京との往来における交通手段の変遷について考察する。

第四章　半兵衛および家族、従業員、銀行員、知人等の東京との往来における交通手段の変遷

一．明治八・九年…勇三と木村商店の従業員が商用で度々上京

学区取締時代の半兵衛は、活動範囲は栃木県内及び担当学区内であった。学区取締時代の半兵衛の上京に関しては、明治六年の日誌（『學區日誌』）に「十一月六日出發中山道本庄宿へ廻り東京へ療養ニ罷出ル学務御掛へ十月廿六日〻三十日間休暇相願出京之事　十一月三十日帰村」（二〇）との記録があることから、同年一一月に一カ月近く病気療養のため上京していたことがわかる。明治七年の日誌（『學務雑誌』）には半兵衛の上京に関する記録はない。半兵衛は織物買継商を営んでいたが、半兵衛自身が商用等で上京するこ

とはほとんどなかったようである。長男の勇三や木村家の従業員らが頻繁に上京している。明治八年の日誌をみると、「善作東京ゟ本庄糟川へ廻リ帰店ス」（八月一九日）、「今朝宅ゟ善作東京行」（九月二三日）、「足利市ゟ善作東二郎東京行」（一二月一〇日）、翌明治九年の日誌では「勇三　東二郎出京」（一月二〇日）、「全作又助東京行」（三月一日）、「林七足利市ゟ出京」（四月三〇日）、「林七正二郎東京行」（六月一五日）、「足利市より善作忠三郎出京ス」（七月二〇日）、「全作兼二郎出京」（九月一五日）、「林七幸五郎出京」（一二月五日）等の記録がある。交通手段は記されていないが人力車であろう。

一方東京からの来訪もあった。特に東京本所緑町の小林家（屋号㊟）の源兵衛、宗兵衛は半兵衛宅をよく訪れている。明治九年二月二二日「東京㊟源兵衛君宗兵衛君来着」。三月一日は「㊟源兵衛氏入来一泊ス」、そして翌二日「早朝㊟源氏小山宿へ發途ス　㊟宗兵衛君東京へ發帰午後八時帰車ス」。八月二六日は「㊟雄三氏宗兵衛氏来臨物産仕入ナリ」。小林家も商店を営んでおり、商用で半兵衛家を訪れることも多かったと思われる。九月二五日の日誌には「△東京小林源三郎氏大患ノ由立飛脚報知アリ○母一人出京ス猿田川岸問忠乗舟ナリ」とある。冒頭の△は凶事を表しているが、小林源三郎（由兵衛）が大病との知らせを受け、母が猿田川岸から舟で上京している。「問忠」とは北猿田河岸の廻送問屋、問屋忠兵衛の略記である。

二．明治一〇年

（一）木村商店の従業員の商用での上京

明治一〇年一月二〇日は「勇三東京年禮行兼二郎供」と勇三と兼二郎が年礼（年始挨拶）で上京、以後も勇三と従業員らの上京が多い。列記すると「林七兼二郎東京行」（四月五日）、「足利市仕舞△全作真吾　東京行」（五月五日）、「真吾東京ゟ帰店ス」（五月二一日）、「勇三全作東京ゟ帰宅」（五月二三日）、「林七　幸五郎　出京」（六月五日）、「林七東京ゟ桐生へ帰ル」（六月二三日）、「東京より幸五郎帰宅」（六月二五日）、「全作　兼二郎　東京行」（七月五日）、「兼二郎一人東京ゟ廿五日足利市へ帰ル善作ハ本庄へ廻リ帰行ノよし」（七月二六日）、「林七　真吾（東京ゟ帰店）」（八月二四日）、九月五日は「全作幸五郎市仕舞東京行」、「林七　東二郎　出府」（一〇月五日）、「東京ゟ太助支店へ帰宅ス」（一〇月二九日）という具合である。

（二）半兵衛の家族らの上京…一〇月は上野の博覧会見物目的

明治一〇年は半兵衛の家族の上京の記録がある。五月二五日の日誌に「午前九時頃ゟ老母　母　まさ　供きく　足利ゟ吉太郎　廿六日朝乗舟出京ス」と、半兵衛の家族ら五人が翌二六日に舟で上京している。九月五日は「糟川守平小泉和二郎両人東京学問修行糟川宗造氏同行ス」と糟川守平、小泉和二郎の両人が学問修行のため上京している。移動手段は人力車であろう。

また一〇月一〇日の日誌に「午前十時過　かつ　とよ　明十郎　ゑつ合四人東京へ発足足利支店ゟとく太助出発明十一日舟ニ而出京ス勇三今十日足利市仕舞川島長十郎氏同伴出京　博覧會見物ニ付ス」とある。半兵衛の家族ら四人が恐らく人力車で出京、翌一一日は木村商店足利支店より、とくと太助が舟で出京、一〇日には市を終えて勇三と川島長十郎が同伴で出京、「博覧會見物」と記されている。一〇月二三日の欄外には「忠三郎東京博覧會行」と木村家の従業員、忠三郎が東京博覧会見物のため上京している。

明治一〇年は立派に整備された上野公園を会場に内国勧業博覧会が盛大に開催されている。国際的な大きなイベントで、見物人も大勢押しかけたと思われる。翌一一月には半兵衛自身も博覧会見物のため上京している。

（三）一一月、博覧会はじめ東京見物で半兵衛が上京…往路は人力車、帰路は馬車と人力車

一一月には半兵衛自身が約三週間上京、上野の博覧会をはじめ名所の観光や行楽等をおこなっている。（＊半兵衛や家族らの上京中における名所の観光や行楽については前稿（注（一）掲出拙稿②参照）半兵衛の東京との往来については、行程や交通手段などが詳細に記録されている。以下、東京との往来における利用交通手段とその変遷に注目してみていくことにする。

出発日一一月五日の日誌に「午前七時過出車正十二時本庄宿に安着両老始せい　しむ　健康無事」とある。上京の際は本庄の内田宅に立ち寄り、両老親はじめ家族の健康無事を確認、安堵している。翌六日は「午前六時三十分出車午後一時過大宮宿松阪屋初五郎へ泊ス」と大宮まで移動、宿泊。翌七日は「午前八時大宮宿出車午前十一時元濱町今店へ安着」と午前中に東京元濱町今店に到着、その後「午後三時過緑町小林氏へ出張一同へ面會」と本所緑町の小林家に到着、家族一同に会っている。

東京では博覧会見物や観光等で約三週間過ごし、一一月二八日に帰途につく。日誌に「午前第四時起余正二郎正五時人力車弐輛ヲ以荷物積入啓運舎へ着」と、早朝に人力車二輛に荷物を積み込み馬車会社啓運舎に行く。そこで本所緑町のせい、お新、文七の三人も加わり「都合五人持荷十五貫余　但大包弐ツ　小中七ツ　馬車へ乗込正六時発車午後十二時三十分熊ケ谷宿泉屋へ着昼飯仕致ス」と総勢五人、啓連舎の馬車で熊谷宿まで行く。熊谷で昼食をとり「文七正二郎両人ハ熊谷ゟ分レ余せい　しむ三人発車午後正三時本庄へ安着」。すなわち熊谷で文七、正二郎らと別れ、半兵衛、せい、しむの三人は（人力車で？）「発車」、午後三時に本庄宿に到着、内田宅に宿泊したのであろう、翌二九日は「午前五時起本庄宿正六時発車同十一時着帰ス」。本庄からは人力車で五時間を要し午前一一時に小俣に帰宅している。往路は専ら人力車であったが、帰路は馬車と人力車を利用している。

三．明治一一年

半兵衛は、明治一一年は六月と九月の二回上京している。

（一）半兵衛の上京

①六月四日～二〇日…往路は人力車、帰路は馬車（開盛舎）と人力車

出発日の六月四日は「午前七時発車カス川へ立寄正十二時本庄着」と人力車で出発、親戚の上州（群馬県）糟川家に立ち寄り正午に武州（埼玉県）本庄に到着、内田宅に宿泊したと思われる。翌五日は「午前五時本庄発車深谷宿いセ勝へ立寄午前八時乗車松初へ寄午後三時大宮ゟ発車午後六時無事京着ス」とある。本庄を午前五時に出発後、深谷の「いセ勝」（伊勢屋勝兵衛）、大宮の「松初」（松坂屋初五郎）に立ち寄り、午後六時に東京に到着している。本庄から東京着まで約一三時間を要している。東京には約半月間滞在、安藤医師の診療、親戚・知人宅の訪問、またのちに半兵衛の二女とよの婿養子になる松本常一郎宅も訪問、その他、新富座の歌舞伎も観覧している。

そして六月二〇日の帰途については、「午前二時起同三時今ゟ乗車開盛舎へ行正四時出車同九時追分着夫ゟ人力車へ乗シ行田ゟ館林へ出　小室氏宅へ立寄夫ゟ足利支店へ立寄午後五時過帰宅ス」とある。すなわち午前三時に人力車で出発、「開盛舎」に行き午前四時に馬車で出発、同九時に追分着。同所より人力車に乗り換え行田を経て舘林の小室宅、そして足利支店に立ち寄り午後五時に小俣に帰宅している。当時は游竜軒、清壽軒、開清舎（開盛舎）、神連舎の馬車が運行されていたが、半兵衛は「開盛舎」（開清舎）の馬車を利用、追分からは人力車で帰宅している。

②九月一四日～一九日…往路は蒸気船、帰路は人力車と渡し船

半兵衛は九月に二度目の上京をしている。出発日の九月一四日の行程については次のように詳しく記されている。

十四日曇晴午前十時過枥木銀行　安田長二郎君同伴　出車生井川岸へ午後一時半漸ク着ス　近頃雨降かち故道路泥濘輓夫労スト雖トモ進行遅々タリ既ニ生井川岸土手前凡十五六町斗ハ野水浸々往来水量深浅弐尺ヨリ三尺ニ至乗車甚困却セリ　車賃カケハ　午後三時前氣船へ塔ス軌道甚疾シ凡乗客　上下百廿人余　二号ノ氣船ト云フ夜十時半扇橋へ着ス夫ゟ乗車　長二郎氏ト供ニ小舟町安田氏商店へ泊ス夜既ニ十二時ノ時計ヲ報ス仍テ寝ニ付ス

すなわち午前一〇時、栃木銀行より安田長二郎氏と同伴、人力車で出発、

降雨による道路泥濘、冠水など大悪路のなか生井川岸まで辿り着き、そこから蒸気船に乗る。乗客一二〇人ほどの大型船で順調に航行、夜の一〇時半に東京扇橋に到着、そこから人力車で小舟町の安田商店に夜十二時過ぎに到着している。利用した蒸気船は「二号ノ氣船」とあるが、通運丸二号船と思われる。当時、栃木県生井河岸から東京扇橋を結ぶ航路は就航されていた。

＊蒸気船、通運丸について

明治四年（一八七一）、深川の万年橋に利根川丸会社が設立され、新川、江戸川を経て関宿から利根川へ入り栗橋へ達する蒸気飛脚船「利根川丸」が就航されたが、その後、明治一〇年（一八七七）一月、内国通運会社の「通運丸」が両国から妻沼（埼玉県）まで就航、旅客貨物を輸送するようになった。同年には水運会社は一九社もあり、運用している蒸気船は六七艘ほどあった。内国通運会社だけでも第一通運丸から第九通運丸まで九隻が運行していた。通運丸は、車輪状の推進器を船の両翼につけている外輪船という外観からも大変な人気振りだったようで、当時の錦絵にも描かれている。

同年には深川扇橋から栃木県の生井村（現小山市）を結ぶ航路も開かれ、さらに翌明治一一年には茨城県の古河への航路も出来た。いずれも発着場所は日本橋蛎殻町であった。さらに明治一三年（一八八〇）には通運丸と同じコースに永島丸が就航するようになり、また翌明治一四年（一八八一）には銚子汽船株式会社が設立され、明治一五年（一八八二）には銚子丸の運行も開始された。銚子丸は通運丸と激しく競合したが、明治一五年、内国通運株式会社と銚子汽船会社が合併して両国通運株式会社となった。以降、利根川の輸送は銚子丸、江戸川の輸送は通運丸と分担してあたることになったという。その後も蒸気船は年々増加、明治一九年（一八八六）頃には一四三隻を数えるほどになったという。今回の上京に際して半兵衛は、当時、航路が開かれた生井河岸から東京扇橋まで蒸気船通運丸を利用したのである。

なお半兵衛が東京に到着した翌一五日の日誌の下欄外に「両氏（注：簿記、益子右馬介　鑑定、松井勘七）栃木へ向出行ス尤モ氣船ニ乗シ」とあり、銀行員二人が東京から栃木への出張においても蒸気船を利用している。

半兵衛の今回の上京は小網町の安田氏本宅を訪れ銀行の件について懇談等、所用を終えて九月一九日に帰途につく。次は当日の日誌である。

午前五時嘉三郎君同伴出車千住大橋際より川原ハ向土手際迚洪水一面ノ湖水ノ如ク旅客其外行人ハ舟渡シ此賃一人前弐戔五厘　草加宿ハ泥土如田地深キ┐一尺ヨリ一尺五　糟壁宿泥土同事漸車ヲ急キ午後四時栗橋宿渡舟へかゝる該所ハ昨十九日午前十時川明ノよしシカシ洪水土手一はい此處渡舟賃甚廉ナリ　一人前八厘　古河町紙屋方旅泊ス　午後五時過

すなわち午前五時に嘉三郎と同伴で東京を人力車で出発、千住大橋際から川原は洪水で「一面ノ湖水ノ如ク」であった。草加宿も糟壁宿もひどい泥土の中を走行し午後四時に栗橋宿に到着、そこから渡し船を利用、午後五時に古河に到着、そこで一泊する。その日の午前一〇時に「川明」、すなわち川の通行禁止が解除され、渡し船（一人前八厘）が利用できたようである。

翌二〇日は「午前五時古河町出車小山宿へ廻り　此間四里　道路不宜弐人輓輓足　栃木迚一輌一円十五戔払　午前九時銀行へ無事着ス」と記されている。すなわち午前五時に二人挽で古河町を出発、極めて劣悪な道路状況のなかを走行、午前九時に栃木本行に到着する。その後、栃木に数日間滞在し二五日に小俣に帰宅している。なお古河から栃木町までの人力車（弐人輓）の運賃について「一輌一円一五戔」と記されている。

（二）半兵衛家と東京の親戚小林家の家族の行き来…人力車に分乗

明治一一年は東京の親戚、小林家との家族の行き来がある。一月二三日は老母の葬儀に参加していた小林源三郎と祐之助が帰京する。日誌に「午前八時　小林源三郎　同祐之助帰京出発内田全作同伴ス」とある。二月二五日は「母　こと　両人乗車出京ス」。二人は約二カ月間東京の小林家に滞在していたのであろう、四月一八日、小林家の人々と共に帰宅する。日誌に「午後

二時東京より母并こと緑町小林とく長女まさ附添下女一人都合五人人力車四輌緑町ゟ出車（東京ゟ七円五十銭酒代とも）無事安着ス車夫ハ直ニ帰京ス」とある。総勢五人で人力車四輌に分乗、人力車四輌の運賃総計が酒代も含めて七円五十銭と記されている。この時半兵衛宅を訪れた小林家の人たちは、約半月間滞在の後、五月二日に帰京する。当日の日誌に「午前三時緑町とく　まさ　喜兵衛　女一人　三車日附ノ覚悟午前四時出車帰京ス」とある。すなわち総勢四人が人力車三輌に分乗、「日附ノ覚悟」、すなわちその日のうちに到着できるよう早朝の午前四時に出発している。

（三）銀行員の銀行用での上京

銀行開業のこの年は銀行員の銀行用での東京との往来が多い。一月二八日は「小泉善七足利町ゟ帰り東京へ明廿九日早朝舟乗帰府由帰ル」。七月一六日は「早朝猿田川岸乗舟相場朋厚并小関熟作　銀行　簿記　傳習人　出京ス」と、相場朋厚と足利支店の銀行員小関熟作らが猿田川岸より船で上京している。右の二件は舟での上京であるが、八月二三日は「午前四時出車　車夫五郎平　小泉兵八郎同時出車東京行」は小泉兵八郎が車夫五郎平の人力車で上京している。一〇月二八日は「午前十一時遠藤保太郎東京へ出発ス」と栃木本行の遠藤保太郎が上京。一一月二三日は「瀧沢喜平二　遠藤保二郎　両氏東京へ帰行」。一二月一四日は「前十時過益子右馬介行用ニ付東京行」。益子右馬介は足利支店の銀行員である。一二月一五日は「前十一時過鈴木氏行用出京ス」。鈴木氏とは栃木本行勤務の鈴木要三であろう。いずれも交通手段は明記されていないが、恐らく人力車であろう。

四．明治一二年

（一）一〇月、半兵衛と銀行員森戸縫が上京…往復とも蒸気船利用

明治一二年一〇月には半兵衛が栃木本行の銀行員、森戸縫と二人で上京している。出発日一〇月一四日の日誌に次のように詳述されている。

森戸午前九時本行へ着ス前十時過森戸余供ニ出車後一時生井川岸へ着ス然ルニ川蒸氣舟到着セス（渇水漸〻午後二時過ニ該舟入津ス依而正午後三時蒸氣出舟ス古河及栗橋迠ハヨク駛走ス栗橋下大渇水又関宿邊甚浅ニ故乗客七八十名不残端舟へ移ル甚困難一里斗ノ里程三時間モ手間取し行徳ニ至頃ハ夜午後十時過雨降漸ク午前四時過扇橋へ着雨甚シ無據川岸船宿へ泊茶一杯不出露宿同様ナリ

すなわち午前一〇時に森戸と共に人力車で出発、生井川岸より蒸気船に搭乗する予定が渇水のため大幅に遅延、午前二時に「入津」（入港）、午前三時に出船する。途中、栗橋、関宿までは「駛走」（疾走）したが、関宿あたりは大渇水、水深が浅過ぎるため乗客七～八十人全員が端舟に乗り移り、行徳に到着したのは午後一〇時過。ようやく朝方の午前四時過ぎに扇橋に到着、やむを得ず「露宿」、すなわち野宿同様の粗末な船宿に宿泊する。翌一五日は「午前七時扇橋出車小網町安田氏宅へ推参折克主人在宿懇切ナル取扱ナリ」と扇橋を出車、小網町の安田宅を訪れ、懇切な応対を受ける。その後、安田商店、第三銀行を訪れ、夜は本所緑町小林氏宅を訪れ宿泊。そして翌一六日、帰途につく。次は当日の日誌で行程が詳細に記述されている。

緑町小林氏宅ヲ午前八時暇乞シテ乗車直ニ小網町安田氏宅へ帰ル夫ゟ第三銀行及ビ安田商店へ前後両度ツヽ出張用弁午後三時過扇橋へ至り同四時川蒸氣船へ搭シ第八号船総テ上等速力克ク走ル関宿前後甚減水故ニ困難ス漸ニシテ十七日午前八時三十分古河川岸へ着ス森戸縫一人同所ゟ上陸直ニ足利支店へ帰店余ハ生井川岸へ前十時三十分着直ニ上陸乗車午後一時栃木銀行へ安着鈴木氏ニ面會

すなわち扇橋より午後四時の第八号船（通運丸）で出発、関宿付近では減水のゆえ就航困難、ようやく翌一七日午前八時半に古河河岸に到着する。森戸は同所で上陸、足利支店に行くが、半兵衛は生井河岸に午前一〇時半に到

着、そこから人力車で午後一時に栃木本行に到着している。翌一七日は「新嘗祭」で仕事は休み。翌一八日は午前栃木本行に勤務、「午前十一時出車後三時過足利支店へ安着ス…夜ニ入午後九時過帰宅」とある。

今回の半兵衛の上京は、銀行員森戸縫と二人だけで、しかも中一日での帰行であった。その後、翌明治一三年一月九日の日誌に「手代森戸縫事故アリ糾問ス本人ヨリ辞職申出ル」とあり、翌一〇日「森戸縫依願免職」とある。すなわち森戸に何らかの不祥事があったようで、糾問の結果、依願退職している。こうした経過からみると、一〇月の半兵衛と森戸二人での上京は、森戸の不祥事が発覚、調査、確認のためではなかったかと推察される。

（二）東京本所緑町の親戚小林家（商店）、その他との交流

明治一二年も、特に東京の親戚、本所緑町小林家との交流がみられる。すなわち二月二五日「小林源三郎午後二時頃入来ス勇三モ同行帰宅ス」と小林源三郎が勇三と共に半兵衛宅を訪れ、二日後の二七日「午前四時起小林源三郎東京へ帰ル」。なお小林家（商店）は家具や建具類を取り扱っていたようで、九月二三日の日誌に「東京緑町小林氏へ火鉢落し注文箪笥金もの等依頼舟積ヲ以逓送ス」と小林氏に火鉢、箪笥、金物等を注文、船便で逓送されている。さらに一〇月二日にも「上桐角火鉢一個荷造東京緑町へ依頼ス〔欄外〕火鉢十月三日送ル」と小林家（商店）に上桐角火鉢を注文している。

そして五月には半兵衛の家族が小林家を訪れている。五月二七日の日誌に「午前六時三十分かつ　明十　みよ　半次車三輌出発東京行」と家族ら四人が人力車三両に分乗して出発、途中一泊し、翌二八日「かつ　明十　外弐人東京緑町へ午後五時無事着ス」。家族らは約一カ月間東京に滞在、七月二日に「〇東京ゟかつ　明十郎　みよ　護衛内田全作一同帰宅ス」とある。

また一〇月三日の日誌に「〇小林おとく子へ母らく昨十一年七月中東京府区長寄留証當村事務所差出置候處らく帰京ニ付返籍戸長役場へ願該寄留証返附ニ付〇小林とくへ渡ス」とある。半兵衛宅を訪れていた小林とくが、帰京するにあたり小林らくの「寄留証」を役場から取り寄せ渡したとある。

その寄留証については、明治一一年の日誌の末尾メモに「寄留証　本所緑町四丁目壱番地主　商　小林源三郎　養母　らく　天保九年八月六日生

右之者今般該縣下下野國足利郡小俣村八拾番商木村半兵衛方え療養之為寄留致候旨申出候条依之申送候依而如件　右区直営　区長　明治十一年六月廿七日　飯島保篤　印　正副戸長御中」と資料が掲載されている。

小林らくは二代目半兵衛の次女で、東京本所緑町の小林由兵衛（先代源兵衛）の妻となった。由兵衛は明治九年九月二二日病死、娘とくの婿（武州蕨町出身）が源三郎を襲名する。なお二代目半兵衛の長女かつは三代目半兵衛の妻であり、かつとらくは姉妹である。そのらくが病気療養のため明治一一年七月から半兵衛宅に寄留していたが、病気が癒えたようで「寄留証」の返付を受け、帰京の途につくこととなったのである。三日後の一〇月六日「午後四時過本所緑町小林店喜平おとく迎ニ到着ス〔欄外〕内田せい同伴来ル」とある。らくを迎えに小林家（商店）の手代、喜平と「おとく」が内田せいと同伴で半兵衛宅を訪れ、らくを連れて翌七日に帰京する。日誌に「午前四時一同起小林らく　同とく　小児　手代喜平守女一人小児お峯其外敬三守平都合小児とも八人出発ス車夫兵蔵　五郎平　外三人　守敬五人合乗　外四車　午前六時一同出車ナリ」とある。小林家の総勢八人が人力車数輌に分乗して帰京する。なお同行した「守敬」とは糟川守平と木村敬三である。

二月六日は「松本安平氏東京ゟ来着」とある。松本安平（安兵衛）は常一郎の父であるが、常一郎は翌明治一三年一二月一〇日に半兵衛の二女とよの婿養子となる人物である。その後、常一郎が半兵衛宅を訪れている。四月七日の日誌に「昨六日夕刻高崎表ゟ松本常一郎氏来臨ス」とあり、五月一〇日には「午後七時東京より松本常一郎来着ス」とある。そして五月一三日には「本日ゟ松本常一郎商店勤務」と、木村商店に勤務することとなる。

また二月二三日は「午十二時東京ゟ合観堂堀田治助絵事師到着ス」とある。合観堂堀田治助は、半兵衛家に居候している放浪画家である。三月二五日は「繪師合觀堂東京へ買物ニ午十二時後ゟ出発ス」と買い物で上京、そして八月五日は「〇耕観堂繪師治助東京へ帰京ス」と帰京している。半兵衛の日誌

には「合観堂」、「耕観堂」のように同一人物が異なる漢字で書かれているケースがみられる。二月五日は「〇木村敬三東京高橋氏入塾出京勇三林七廣四郎供ニ出府ス」と半兵衛の二男、敬三が入塾のため勇三、林七、廣四郎らと共に出京している。四月二〇日は「東京中村治平氏来臨一泊ス」。七月二一日は「東京ゟ敬三守平半二帰宅ス」と敬三、糟川守平、藤本半二が帰宅している。敬三は夏季休暇であろうか。交通手段は人力車であろう。

（三）勇三および木村家の従業員、銀行員等の上京

明治一二年も勇三、木村家の従業員、銀行員等の上京がみられる。三月六日は「足利支店ゟ勇三出京ス」。五月二三日は「全作出京」。七月一九日は「午前夜二時三十分起藤本半次同三時前出京東京行車夫与惣二」と藤本半次が車夫与惣二の人力車で上京している。一二月七日は「勇三并相場朋厚出京」。

また銀行員らの銀行用での上京も多い。二月一二日は「川島長十郎出府ニ付第三銀行へ届者種〻依頼ス」と川島長十郎の上京に際し第三銀行への届け物を託している。三月一一日は「鈴木氏公債賣拂ノ要件ニ付同時出京ス」と銀行役員鈴木要三が公債売払の件で上京。三月二六日は「午前三時小泉兵八郎出車登京ス」。小泉兵八郎は栃木本行の支店長であり、所用を終えて四月一日「午後六時小泉兵八郎東京ゟ帰店ス」。同氏は六月下旬にも上京、二九日の日誌に「小泉兵八郎氏廿八日夜東京ゟ栃木へ廻リ帰店ス来臨ス」とある。七月二〇日は「竹内保次郎私用ニ付出京ス聊行用ヲ托ス午後八時過出発問忠乗舟ノ積り」と栃木本行の鑑定人竹内保次郎が私用での上京に際し、銀行用をも託している。竹内は午後八時過、猿田河岸の「問忠」（廻漕問屋・早川忠吾）の舟で上京の積りとある。

五．明治一三年…関東地方に乗合馬車が普及

（一）半兵衛の上京…四月、七月、一〇月と三度上京

半兵衛は、明治一三年は四月、七月、一〇月と三度上京している。なお七月は往復とも乗合馬車を利用しており、この年は乗合馬車が普及している。

①四月一三日～三〇日…往復とも人力車

明治一三年最初の上京は四月一三日に出発、当日の日誌に「午前八時乗車五郎平足利銀行へ立寄夫ゟ和洋舎寄館林小室氏罷出午飯馳走ニナル午後三時半乗車行田町へかかり道路泥寧困却ス漸夜ニ入八時半鴻巣宿伊セ半へ泊ス」とある。すなわち午前八時に車夫五郎平の人力車で出発、途中、足利銀行、和洋舎に立ち寄り、舘林の小室宅で昼食を馳走になり、午後三時半に出車、行田町を経由して午後八時半に鴻巣に到着、宿泊している。途中、行田辺りは「道路泥濘困却ス」とある。翌一四日は「午前七時出車大宮宿松初へ立寄午飯酒馳走ニナリ午後三時支店へ着」とある。すなわち午前七時に鴻巣を出車、途中大宮宿「松初」（松阪屋初五郎）で昼食をとり出車、午後三時に東京支店に到着している。

東京では約半月間、上野観古博覧会、千住宿製絨場、丸山伝右衛門の家屋、庭園等の名所の観光や親戚知人宅を訪問、四月三〇日に帰途につく。当日の日誌に「午前四時半支店出車（車夫　緑町）大強励ナリ道路泥濘漸午后六時四十五分本庄宿内田氏安着ス」とある。すなわち午前四時半に本所緑町小林家お抱えの車夫重吉の人力車で出発、道路泥濘のなかを走行、午後六時四十五分に本庄の内田家に到着している。昼食を挟んでであろうが、約一四時間半に及ぶ力走であった。翌五月一日は「午前八時過本庄宿内田氏出車粕川へ立寄昼食シ午後三時帰宅」と本庄出発後、上州の糟川家に立ち寄り昼食、午後三時に小俣に帰宅している。今回は往復とも人力車を利用、往路、帰路とも途中、複数箇所に立ち寄っており、その点では人力車は実に便宜のきく乗り物であったと言えよう。

②七月一八日～三〇日　往復とも東京～本庄間は馬車を利用

半兵衛は同年七月に二度目の上京をしている。出発日の七月一八日は「午前冷氣五時全作共ニ出車同八時糟川へ立寄夫ゟ本庄宿内田氏着ス午前十一時三十分ナリ」とある。すなわち内田全作と共に人力車で出発、糟川家に立

ち寄り、正午前に本庄の内田宅に到着、宿泊している。翌一九日は「午前五時三十分本庄宿清壽軒馬車ニ搭し出発曇天午前十時頃晴レ南風アリ午後四時東京支店安着ス」と本庄からは清壽軒の馬車で上京、午後四時に東京支店に到着している。当時は游竜軒、清壽軒、開清舎（開盛舎）、神連舎の馬車が運行されていたが、半兵衛は清壽軒の馬車を利用している。

東京では第三銀行、親戚、知人宅を訪問、また名所等の観光もおこない七月二九日に帰途につく。当日の日誌は「夜十二時一同起前一時筋違游龍軒へ参ル　敬三　守平　余三人午前二時前馬車へ搭シ本庄宿へ向出發ス雨降強シ午前十時過吹上村へ着雨聊止ム朝飯致ス夫ゟ熊ケ谷宿ヲ経本庄へ着道路泥濘大困却漸午後二時本庄へ安着内田氏へ泊ス」と詳述されている。すなわち半兵衛、敬三、守平の三人で游龍軒の馬車を利用、午前二時に出発、熊谷宿を経て午後二時に本庄に到着するが、「道路泥濘大困却」と記している。内田宅に宿泊、翌三〇日は「午前八時本庄宿敬守余三車出發カス川へ立寄午飯仕度守平カス川へ止ム余敬両人出車午後六時過帰宅ス」とある。すなわち本庄からは人力車三輛に分乗して午前八時に出車、糟川に立ち寄り昼食、守平は糟川で下車、半兵衛と敬三はさらに乗車、午後六時過に小俣に帰宅している。東京との往来において従前は専ら人力車であったが、明治一〇年一一月、および明治一一年六月の東京からの帰路において馬車を利用、そして今回は東京との往復ともに東京～本庄間で馬車を利用している。この頃、関東地方に乗合馬車がかなり普及しつつあった。

（二）乗合馬車の登場と普及

東京近辺では、すでに明治初年に乗合馬車がみられた。『明治世相編年辞典』によると、明治二年一月、「横浜の川名幸左衛門、下岡連杖（写真家。一八二二～一九一四）ら八名は東京横浜間の乗合馬車営業を出願す。ところが中山謙治も三月には営業を出願したので、共同営業で三月に許可され、成駒屋と称して吉田橋付近で営業した。〈横浜歴史年表〉」（一一）とある。さらに明治四年八月には「高崎藩小林伊麻里出願の東京高崎間の馬車運輸が大蔵省より許可された。」（一二）とある。特に東京では馬車が急増、明治四年九月には「東京市中の馬車通行の道筋を定めて、他の道路の通行を禁ず。」（一二）と馬車専用の道路も設けられるようになった。さらに翌明治五年（一八七二）三月には、馬車の普及による交通事故を防ぎ、スムーズな運行がはかれるよう「馬車規則」も定められた。「馬車規則」は全八条から成るが、「御者は巧なものを撰ぶこと、馬車前には必ず別当を走らせること、馬車が行きあうときは互いに左に寄ること、馬車通行の時は時々かけ声をし、昼は小旗をたて、夜は燈火を掲げ、馬車置場は往来の妨げにならぬように」（一三）等の注意事項が定められている。明治一〇年代に入ると、東京を中心に全国的にも馬車数が増加していく。次表は明治八～明治一三年の全国の馬車数と人力車数の推移である。（一四）

人力車・馬車の台数

	二疋立馬車	一疋立馬車	二人乗人力車	一人乗人力車
明治　八年	六三	二三〇	三六一八〇	七三四七五
〃　九年	八七	三六六	四〇六三一	八四六二四
〃　一〇年	一三九	五八七	四五四三四	九二三四二
〃　一一年	一五九	八六六	四五七五六	九八八一六
〃　一二年	一七四	九一九	四七七五五	九八七二三
〃　一三年	一九〇	一一二六	五一四六八	一〇五五五〇

〈日本帝国統計年鑑〉

なお地方にも馬車路線が拡大していく。明治五年一〇月には東京の千住と宇都宮間に馬車が開通する。前掲『明治世相編年辞典』に「（明治五年）一〇月八日　千住宇都宮間運輸馬車開業す。千住宇都宮共に朝七時に出発して、午後七時着であった。持ち物は手廻り品小包一個に限り一人二両、荷馬車は荷物一駄（三十六貫）一両三分」（一五）と、乗車の際の持ち物の制限、持ち物の料金等も記されている。『栃木県史』にも「明治五年十月八日、長距離交通を受けもつ乗合馬車の営業が開始された。東京宇都宮間馬車会社

が設立され宇都宮―東京千住間を十二時間で結び…」(一六)との記述がある。さらに明治一〇年(一八七七)には仙台でも乗合馬車が運行されるようになった。前掲『明治世相編年辞典』に「明治一〇年　一一月一四日　仙台国分町仙里軒、岩沼行乗り合い馬車をはじめる。〈仙台市史年表〉」(一七)とある。

明治一〇年代には東京を中心に関東地方各地との馬車路線がさらに拡大普及する。前掲『明治世相編年辞典』に、明治一二年四月一日「日本橋馬喰町、浅草雷門前から宇都宮、日光、白河まで乗り合い馬車の運行開始。午前三時三〇分、五時三〇分馬喰町を発し、浅草雷門前から四時、六時の出発。宇都宮から白河と日光に向けては午前六時の発車で、これは千里軒手塚舎の共同であった。〈事物起源〉」(一八)と、東京から宇都宮、日光、白河までの馬車の運行が開始された。また東京から各地までの馬車料金について「東京からの料金は、千住まで一四銭、草加まで三五銭、越谷まで四九銭、幸手まで九〇銭、栗橋まで一円、古河まで一円一二銭、小山まで一円四十銭、宇都宮まで一円九六銭であった。〈東京商人録〉」(一八)と記されている。

半兵衛は明治一〇年一一月と翌一一年六月の東京からの帰路、さらに一二年七月は往復とも東京～本庄間で馬車を利用したが、すでに東京と埼玉県内各地を結ぶ馬車路線が運行されていたのである。行きは清壽軒、帰りは游龍軒の馬車を利用しているが、当時は游竜軒、清寿軒、開清舎、神連舎の馬車が運行されていた。その後、明治一五年四月にはその四軒の馬車会社が聯合、「西北社」と改称されたようである。前掲『明治世相編年辞典』に「明治一五年四月一日、游竜軒、清寿軒、開清舎、神連舎の四軒聯合して西北社と改称し営業開始す。本局は神田区連雀町十八番。行く先は熊谷、本庄、高崎、前橋、渋川、松井田、坂本」(一九)とある。

なお半兵衛の明治一二年一二月八日の日誌に「午前正六時乗車　五郎平車犬伏迠　正田氏へ立寄午飯酒食馳走章二郎君供犬伏三枡屋ゟ馬車ニ乗シ午后四時三十分大和屋半平へ着」とある。すなわち半兵衛は栃木町までの往来は常に人力車であったが、その時は犬伏三枡屋(現在の佐野市犬伏町)から栃木町までは「馬車ニ乗シ」とあり、栃木県内においても馬車が普及しつつあったことがうかがえる。

なお明治一〇年代は、関東地方各地に馬車会社が設立されつつあったようである。郷土史家・菊地卓氏の調査によると、群馬県境町(現・伊勢崎市)に「境町時間馬車会社　北爪雛吉」というチラシがあるという。『境町史　歴史編下』(一九九七年)によると、北爪は伊勢崎藩士族で、大政奉還後、養蚕の取引が盛んだった境町に転居してきた。そこで旅館、料理屋(屋号、境館)を経営、かつ馬車会社も始めたという。馬車会社は明治から大正年間にかけて運行されたが、大正末には廃業、乗合自動車(バス)経営に変わったという。(二〇〇二年一〇月、当時、境町文化財整理室の坂爪久純氏のご教示)なお前掲のチラシには馬車と汽車の時刻表が並べて掲載されており、馬車の運行は汽車との接続が考えられていたようである。なお足利地方でも、現在の東武線足利市駅向かいの小山信用金庫本店前から飛駒村まで往復の馬車が大正期まで運行されていたという。(明治三八年生まれ、故野沢ツル氏談)馬車会社は、鉄道の駅と直結するもの(駅馬車)と町(街)の中心部と郊外を結ぶものとに大別できるようであるが、いずれも昭和期になると乗合自動車(バス)会社にとって変わることになったという。(菊地氏談)

③一〇月五日～一九日…往路は本庄から馬車の予定が洪水のため通行止め、やむなく人力車、徒歩、渡船等を乗り継ぐ　帰路は人力車

半兵衛は、明治一三年は一〇月に三度目の上京をする。出発日の一〇月五日の日誌に「午前八時出車　車夫　五郎平　映晴カス川へ立寄夫ゟ本庄内田氏へ午後四時過安着泊ス」とある。すなわち車夫五郎平の人力車で出発、糟川家に立ち寄り、本庄の内田宅に午後四時過に無事到着。内田宅で一泊、翌六日の行程については、日誌に次のように詳述されている。

午前三時ニ起キ馬車出發ヲ待ツ如何ニセン川〻出水ニ付馬車東西とも通行止ム漸〻午前六時出車東京へ發ス本庄宿ゟ一里半行ク小山川橋落歩行旅人ノ外通行止メ無拠此處ゟ下車手荷物肩ニかけ獨歩ス至ル處人力車更

ニナシ瀬岡村中程ニ至一ノ車アルヲ認熊ケ谷宿和泉や迠乗車和泉や車夫依頼東京迠通し走戸田川土手下一圓ノ出水戸田橋東ノ新道ゟ志村坂下迠渡舟往来凡里程一里斗夫ゟ又ゝ乗車午后七時前新大坂町支店へ安着ス

すなわち午前三時に起床、馬車で出発の予定が川の増水で馬車は通行止め。やむなく午前六時に人力車で出車、本庄宿より一里半行った小山川の橋が崩落、歩行者以外は通行止めのためやむなく下車、手荷物を持って徒歩で行く。瀬岡村の中程でようやく人力車を見つけ熊谷宿和泉屋まで乗車。さらに車夫に頼んで東京まで走行する。途中、戸田川土手下一帯が増水のため戸田橋東の新道から志村坂下まで里程一里ほど渡し船に乗り、志村坂下から再び人力車に乗車、午後七時前にようやく東京の大阪町支店に到着する。毎年九～一〇月は、昔から「二百十日」、「二百廿日」と言われ、暴風雨の時期で、交通機関も当初予定の通りにいかないことも少なくなかった。

東京では安田氏の別荘や親戚知人宅を訪問、勇三と結婚することになる清水家の清水卯三郎が本町三丁目に開いた店舗「瑞穂屋」も訪れている。そして一〇月一九日、帰途にたつ。当日の日誌に「午前四時東京支店出車道中無滞午后五時半足利支店へ帰店ス車夫緑町重吉同夜支店へ泊ス」とある。すなわち専ら東京緑町小林家のお抱え車夫重吉の人力車で「道中無滞」一三時間半走行、午後五時半に木村商店足利支店に到着。その夜は支店に宿泊、翌二〇日「午前足利銀行へ出勤ス午後六時過帰宅闔家一同安全ナリ」と銀行に勤務し夕刻帰宅している。「闔家一同安全ナリ」と記している。

（三）勇三、親戚知人、銀行員等の東京との往来

明治一三年、半兵衛以外の人たちの東京との往来についてみると、まず次に列記したように勇三が頻繁に上京している。「勇三東京へ出発ス午前九時ナリ」（一月一八日）、「東京ゟ勇三帰着ス」（一月二九日）、「早天勇三東京行」（二月四日）、「前日勇三東京ゟ帰宅」（二月一五日）、「勇三東京ゟ成田山へ廻り夫ゟ本日午後帰宅ス」（五月九日）、「勇三出京穴原善十郎同伴ス午前八時ナリ」（八月二七日）、「午后四時過勇三東京ゟ帰宅」（九月一二日）、「勇三東京行」（一一月一五日）等、いずれも商用であろうか、東京には一〇日から半月程滞在している。交通手段は人力車であろう。

また東京から親戚、知人等の来訪も多い。列記すると「東京より廣瀬幸作来臨ス年始ナリ」（二月一二日）、「東京芝井町小泉銀蔵妻於年子来ル一泊翌廿九日午後一時帰ル」（二月二八日）、「午後三時過ニ東京菊池永之助君来臨一泊宗兵衛君同席馳走ス」（四月四日）、「小泉兵八郎氏三男国三郎八重歯数本ヲ生シ治療旁出京」（五月五日）、「午後六時過ゟ東京佐野屋藤兵衛氏来臨馳走・・・小泉氏東京ゟ同着ス」（五月一六日）、「午后四時頃東京林町小林祐之助氏緑町小林源三郎氏来着」（六月二一日）等、いずれも交通手段は明記されていないが、恐らく人力車であろう。

なお舟（蒸気船）の利用もみられた。すなわち四月五日の日誌に「〇母及新川貞助氏出京治療ノ為メ猿田川岸迠六日朝舟へ搭シ出京ス」と母と新川貞助が治療のため六日に猿田河岸から舟で上京している。八月二九日は「午前七時敬三守平東京へ出車ス川又ゟ川蒸瀣舟へ搭シ上京ノ「今宗兵衛君御同伴ナリ」と東京に学問修業に出ていた敬三と糟川守平が夏季休暇を終えて川又河岸より蒸気船で上京、東京の小林家今宗兵衛も同伴している。

なお川又（俣）河岸は、利根川の水運を利用して年貢米や木材の積み出しもおこなわれ、宿場も賑わっていた。半兵衛の日誌をみると、川又河岸の利用者も多いが、明治二一年の両毛鉄道の開通により次第に衰退していった。

また前年には松本常一郎とその父、安兵衛は半兵衛宅を何度も訪れていたが明治一三年一二月一〇日は「とよ　常一郎婚儀無滞目出度相済」と半兵衛の二女とよ（登代）と松本常一郎の婚儀がおこなわれる。そして婚儀を終えて一二月一八日「松本安兵衛氏大原へ廻リ帰京出立午前十時過ナリ常一郎入籍致ス」と常一郎の父、安兵衛が大原経由で帰京。常一郎は入籍を済ませ、三日後の一二月二一日「常一郎足利ゟ川又川蒸便へ搭し東京支店へ在勤出発ス」と木村商店の東京支店に勤務のため川又河岸から川蒸気船で帰京している。

また銀行員の銀行用での東京との往来も多い。列記すると一月二九日は「夜七時前竹内氏東京ゟ栃木本行へ廻り無事帰店ス」。「竹内氏」とは銀行足利支店勤務の竹内保二郎であろう。四月五日は「午前十時頃安田氏ハ帰京ス」。四月九日は「益子氏東京ゟ帰店」。「益子氏」は銀行足利支店勤務の益子右馬之助である。四月一一日は「前田泰次郎出京ス」。前田泰次郎は足利支店勤務である。九月二二日「同（注、午前）八時前竹内保二郎銀行用出京ス」。一一月二二日「小泉兵八郎氏午前六時出車栃木本行へ廻リ出京ス」。小泉兵八郎は栃木本行の支店長で上京も多い。いずれも交通手段は明記されていないが、恐らく人力車であろう。七月五日は「午前十時瀧澤出京部屋川岸ゟ乗舟」と栃木本行勤務の瀧澤喜平次が部屋川岸から船で上京している。

部屋河岸は巴波川（うずまがわ）の藤岡地域にあり、ここから大型の川舟が思川、渡良瀬川を経て利根川を下り東京まで航行した。明治中期まで栃木近辺と東京を結ぶ巴波川水運の河岸として栄えた。なお明治二二年には部屋、西前原、新波、石川、帯刀、緑川、蛭沼、富吉、中根の九村が合併して部屋村となり、戦後の昭和三〇年（一九五六）には赤麻村、三嶋村とともに藤岡村に合併になった。

六．明治一四年…馬車および蒸気船利用の拡大

（一）半兵衛の上京

明治一四年、半兵衛は四月、八月、一一月と三度上京している。四月は上野博覧会の見物、八月は銀行用、一一月は持病の心下痛が悪化、東京の名医の診療を受けるため上京、翌一二月には療養生活を送るため家族と上京、約半年間の療養生活を送ることになる。

①四月一二日～五月二日…往路は本庄より馬車、帰路は人力車

出発日は四月一二日で、日誌に「午前五時出車　車夫五郎平　粕川氏へ立寄直ニ本庄宿内田氏へ到着午前十時三十分午十二時頃粕川氏到着」とある。すなわち車夫五郎平の人力車で早朝の午前五時に出発、途中糟川家に立ち寄り午前一〇時半には本庄の内田宅に到着、遅れて正午頃、粕川氏も到着している。内田宅で一泊し、翌一三日は「午前二時三十分起床…午前四時過清壽軒馬車へ乗午後三時支店へ安着ス」と、午前四時過ぎ本庄から清壽軒の馬車で上京している。

東京では上野博覧会の見物、芝紅葉館での宴会、名所の観光、知人宅の訪問等をおこない五月二日に帰途につく。日誌に「午前四時新大阪町支店出發車夫緑町重吉午後五時半帰宅家族一同無事欣喜〳〵」とある。すなわち専ら本所緑町小林家お抱えの車夫重吉の人力車で帰宅、途中、昼食をはさみ約一三時間半走行、午後五時半に全員無事に帰宅している。

②重吉の「帰り車」を利用し家族らが上京、約一ヶ月間、東京遊覧

半兵衛の上京の主目的は上野博覧会の見物であったと思われるが、半兵衛が帰宅二日後の五月四日、重吉の「帰り車」を利用して家族らが博覧会見物のため上京している。当日の日誌に「午前七時前母及とよ　しむ　東京へ出車車夫　重吉　五郎平」と重吉と五郎平の人力車二輛に母、とよ、しむの三人が分乗して上京。さらに約一〇日後の五月一五日は「かつ　まさ　明十きね　川上いよ　下女こと　合六人東京行」と半兵衛の家族ら総計六人も人力車数輛に分乗して上京、先の三人と合わせて総計九人が上京している。そして約一カ月間、上野の東京博覧会をはじめ名所の観光等で過ごし、六月一三日「午後六時半東京より　きね　しむ　村口附添帰宅ス」。さらに六月二四日は「午後七時過東京ゟ本庄宿へ廻り　かつ　まさ　明十　健全共ニ安帰行」と家族たち全員が帰宅している。

③八月二五日～九月五日…往路は本庄より馬車、帰路は蒸気船利用

半兵衛は八月二五日、二度目の上京をおこなっている。当日の日誌に「午前四時余敬三出車前七時カス川氏へ着ス車夫　五郎平　久蔵　映晴炎熱如燃廿五日午前十一時過カス川出車午後一時本庄へ三人安着」とある。すなわち午前四時の早朝に半兵衛、敬三が車夫五郎平と久蔵の人力車にそれぞれ

乗り出車、出発、途中糟川家に立ち寄り、そこで守平も加わったのであろう、午後一時に本庄に「三人安着」とある。当日は猛暑だったようで「路中暑氣猛烈且難堪□九十度以上ナルベシ」と記している。内田宅では「内田老翁健全老母眼疾○全作せい無事節三尤も健壮生育」と老母は眼疾があったが、老翁はじめ家族も無事で、特に孫の「節三尤も健壮生育」と記しており、安堵したものと思われる。その夜は内田宅に宿泊、夜中に起床、午前二時に清壽軒の馬車で出京している。続けて日誌に「夜十二時起床午前二時　守平　敬三　清壽軒馬車ニ搭シ出京」とある。「守平　敬三」とあることから糟川から守平も加わったことが分かる。そして「午後一時無事三人安着ス本材木町宅一同無事」と約一一時間後の午後一時に東京に無事に到着している。

東京では横綱町の安田氏を訪問、懇談、また駿河台の山崎忠門氏を訪問「銀行業務細詳質問ス同君懇切御教示アリ」とあるように銀行用務も果たし、知人宅をも訪問、九月五日に帰途につく。当日は第三銀行、安田銀行を訪れた後、東京支店より「午後二時三十分出車扇橋へ蒸瀘へ搭ス午後四時過河水満〻速力強し」と人力車で扇橋まで行き、そこから川蒸気船に搭乗する。「河水満〻速力強し」と航行も順調だったようである。船中で一夜を過ごし、翌六日は「午前五時古河へ着夫〻新波前七時過到着直ニ乗車橡木へ前十時前安着」とある。すなわち午前五時に古河河岸、さらに午前七時に新波河岸に到着、そこから人力車で栃木まで行き「同夜栃木本行へ泊ス」。そして翌七日「午前九時出車午後一時足利銀行へ到着午後八時過帰宅」とある。

日誌にある新波（にっぱ）河岸は、栃木町藤岡地区の巴波川舟運の中心として対岸の部屋河岸とともに江戸期から明治にかけて中継積換河岸として栄えた。麻ひもなどの商品作物を上流の栃木河岸から部屋河岸・新波河岸まで小舟で運び、同所で大船（高瀬舟）に積み換えて渡良瀬川、利根川関宿を経て江戸方面まで運び、逆に江戸からの荷物をこの両河岸で小舟に積み換え上流まで運んだ。明治一八年の東北本線、明治二一年の両毛鉄道の開通により舟運は次第に衰退していくこととなった。

半兵衛の日誌から東京との往来の様子を振り返ると、当初は専ら人力車であったが、明治一〇年代に入り乗合馬車と船の利用が増加、特に明治一四年は川蒸気船の利用が急増している。半兵衛が東京滞在中の九月一日は「藤本半次午后ノ川蒸氣ニ搭シ帰郷ス」とある。

④一一月、持病が悪化、名医の診療を受けるため上京…人力車で往復

一一月九日の日誌に「余午前十時頃〻持病心下痛強シ午後三時ニ至全治ス」とあるように半兵衛の持病、心下痛が悪化する。そこで東京の名医の診察を受けるため一一月一七日に上京する。当日の日誌に「午前七時發車重吉午后三時鴻巣宿伊セ半へ着泊」と車夫重吉の人力車で出発、緊急を要することなので途中、本庄内田家に立ち寄ることもなく鴻巣まで行き一泊。翌一八日は「午前七時出車午后二時前無滞本材木町へ安着氣分よろし」と午前七時に鴻巣を発車、七時間後の午後二時前に東京本材木町に無事到着している。

東京では名医、小林恒の診察を受け、一一月二三日に同じ車夫重吉の人力車で帰途につく。当日の日誌に「午前七時本材木町余とよ共仂夫　重吉一人乗シ出發ス道中無滞午後三時鴻巣宿いセ半へ泊ス氣分至而よろし」と二女とよ（登代）と二人で乗車、往時と同じ鴻巣宿いせ半に宿泊する。翌二四日（日誌は廿五日となっているが、二四日の間違い）の行程については日誌に次のように詳述されている。

午前六時鴻巣いセ半出車熊ケ谷宿邊〻聊ツヽ疼痛相起し追〻あしく妻沼道大悪路凸凹及橋梁尤も老嶮数カ所甚困難仂夫モ苦力ス妻沼へ至痛益甚し漸ニシテ古戸渡舟及橋渡スル時ハ別而大煩悶太田町へ掛り聊痛薄ラキ追〻よろし午後二時過帰宅ス然し何分心痛ノ氣全治セス夜八時頃〻疼痛甚し十二時頃ニ至漸ニシテ治ス寝眠ス

すなわち早朝午前六時に鴻巣を出車、熊谷辺りで疼痛が始まり、特に妻沼では道路の凸凹もひどく、橋梁も老朽化していて車夫も苦労、半兵衛も疼痛

がひどくなり煩悶している。古戸で渡舟に乗り、太田辺りでは疼痛も聊か和らぎ午後二時過に小俣に到着する。帰宅後も夜八時頃は疼痛が激しく苦悶、夜中の十二時頃にようやく痛みも癒え眠りにつく。そして一二月一二日には東京で療養生活を送るため家族らと蒸気船で再び上京することになる。

⑤一二月一二日、東京で療養生活のため家族と蒸気船で上京

東京での診察を終えて一旦小俣に帰宅した半兵衛は、東京で療養生活を送るため一二月一二日に家族と共に再び上京する。次は当日の日誌である。

十二日映晴静午前九時猿田川岸ハシケヘ老母余まさ乗舟早川田ヘ前十一時乗込夫〻通運丸十四号ヘ搭ス舟路都合克午後二時半於古河第九号舟ヘ乗換ル余疼痛追〻甚し煩悶至難ス母ハ大いニ看護サレ午後八時過漸治スまさ機嫌よし岩下善七郎氏同船夜十時蠣殻町ヘ到着夫〻直ニ俥二輛ヲ雇ヒ本材木町宅ヘ無事安着余氣分よろし

すなわち午前九時、猿田川岸から半兵衛、老母、まさの三名で乗舟、午前一一時に早川田へ向かい、そこから通運丸十四号に乗船、順調に航行し午後二時半に古河より第九号船に乗り換える。疼痛が激しく煩悶、母が看護し痛みは癒える。岩下善七郎も同船、夜一〇時に東京蠣殻町に到着、そこから人力車二輛で本材木町の家に無事到着する。「余氣分よろし」と記している。

（二）船の利用が増加

半兵衛も上京に際して蒸気船を利用したが、明治一四年は半兵衛以外にも多くの人が東京との往来において船（蒸気船）を利用している。列記すると、二月一七日は「午前八時藤本半次木材十一駄上乗トシテ問忠舟ヘ搭シ出京ス」と、藤本半次が木材十一駄の運送を「問忠」（北猿田村の廻船問屋、早川忠吾）に依頼し上京している。三月一〇日は「夜ニ入相場朋厚小泉兵八郎勇三清三郎四人猿田川岸ヘ行乗舟出府ス」と相場、小泉、勇三、清三郎の四人が猿田川岸より船で上京している。六月二一日は「午前七時　井清二郎　竹内安二郎　林七　東京ヘ發車川俣〻川蒸瀘に搭シ登京ス」と、井（伊勢屋）清二郎、銀行員の竹内安二郎、木村家の使用人林七の三人が川俣より川蒸気船で上京している。七月三〇日は勇三が体調を崩し、東京から医師安藤正胤の来診を受け快方に向かうが、診療を終えた安藤医師は、八月二日「午前六時安藤氏供穴原古河迠出車夫〻川蒸気ニ搭シ帰京ス」と古河から川蒸気船で帰京している。一〇月二一日は「足利支店〻井主人　かつ　明十　鏡共午前八時頃出車川又〻蒸瀘ヘ搭シ出京ス」と、井（伊勢屋）の主人と半兵衛の家族（かつ、明十、鏡）が川又から川蒸気船で上京している。

（三）勇三、家族等の上京

明治一四年も半兵衛の家族の上京がみられるが、特に勇三は商用等で頻繁に東京と行き来している。列記すると「勇三足利市ヘ東京ヘ十六日　朝發ス」（一月一五日）、「勇三東京〻足利市ヘ帰店」（一月三〇日）、「勇三出車　五郎平　久蔵　東京支店ヘ出張ス」（二月一二日）、「勇三東京〻帰宅」（三月四日）、「前夜十時過勇三東京〻帰宅」（三月二日）、「午後六時三十分東京〻勇三帰宅ス」（七月七日）等、明記されていないものも人力車利用であろう。

また半兵衛の二女とよの婿となり木村商店東京支店の経営を任された松本常一郎も「午十二時常一郎出京致ス」（一月二六日）、「東京〻常一郎帰店ス」（三月二七日）、「午後東京支店〻常一郎来着」（七月二日）等、よく東京との間を往復している。また「益子氏ヲ以東京ヘ遣ス」（五月一六日）、「小泉氏東京行」（七月一五日）等、銀行員の上京もみられる。「益子氏」は足利支店勤務の益子右馬之介であり、「小泉氏」は栃木本行支店長の小泉兵八郎である。移動手段は明記されていないが、恐らく人力車であろう。

七．明治一五年

（一）療養中の半兵衛への見舞客の帰途は馬車か川蒸気船

半兵衛は明治一四年一二月から翌一五年五月まで東京で療養生活を送る。

その期間中、足利方面からも大勢、半兵衛の見舞いに訪れているが、帰郷の際は大抵、川蒸気船を利用している。一二月二六日は「午前十時過勇三来着余病伺トシテ態〻出京ス」と勇三が見舞いのため上京、同日「前十一時頃母及まさ相場氏三人支店へ参リ夫〻川蒸瀛舟へ搭シ帰郷ス」とある。半兵衛の看病にあたっていた母、まさと相場氏三人が蒸気船で帰郷している。二六日に上京し見舞いに訪れた勇三は、二八日「午後三時川蒸瀛へ乗込帰宅」。三一日の大晦日には「夜三時半小又ヨリきね及かね差添小杉三人無事到着外ニ荷物五箱同断河水渇レ蒸瀛不進通甚遅行也」と小俣からきね、かね、小杉の三人が荷物五箱を携え川蒸気船で上京するが、河川が渇水状態で船の運航が捗らず、かなり遅延して夜中の午前三時半に到着している。

年が開けて明治一五年一月一日は「午後十二時小杉虚東遊龍軒馬車ニ搭シ帰郷ス粕川守平同車本庄宿〻粕川へ帰省ス」と、見舞いに訪れていた小杉虚東と粕川守平二人が「遊龍軒馬車」で帰郷している。一月一八日は「午後四時内田全作今六時馬車ニ搭シ本庄宿へ帰郷ス」と内田全作が本庄まで馬車で帰宅している。本庄方面は東京～本庄間に馬車が運行されており、馬車の方が便利だったであろう。しかし本庄方面以外は、大抵川蒸気船を利用している。一月六日は「金子忠三郎来ル在所へ菓子一箱　まさ　明十　送り頼ム同人本日川蒸氣帰郷ノ由」とある。一月一二日の日誌には「昨十一日川蒸瀛舟ニ乗しかつ子一人尤も支店卯七出京同召連夜一時頃新大阪町支店へ到着其夜支店へ泊シ今日前九時本材木町之寓居へ来着致ス」と、前日の一一日、妻のかつ（子）が卯七と共に川蒸気船で上京、新大阪町支店に到着、支店に一泊後、一二日午前九時に本材木町の寓居に到着している。かつは半兵衛の許に看病で一週間ほど滞在するが、感冒に罹り帰郷となる。一月一九日の日誌に「かつ子寒冒聊よし後三時川蒸瀛舟へ卯七差添乗舟帰郷ス」とある。一月三一日は「午後三時河蒸瀛ニ搭シ勇三及関口嘉平帰郷ス」とある。

二月一日は「午後三時過小泉兵八郎氏出京」、そして半兵衛の見舞いにも訪れたのであろう、三日後の二月四日「午後三時川蒸瀛ニ搭シ小泉兵八郎氏　常一郎両人帰郷ス」と、常一郎とともに川蒸気船で帰郷している。二月三日は「藤本半次出京到着ス」、そして二日後の五日「午後三時藤本半次川蒸瀛船に乗シ帰郷ス持物取合大一箱余有其外非常提灯五張印付送ル」と、藤本半次の帰郷に際し大一箱余、その他非常提灯五張等、多くの荷物も運んでいる。二月二八日の日誌には「足利草雲氏へ銕鉛煎弐個為見舞送宅へ実事譚　廿一　廿二　廿三　三冊　其外食類数種〇小泉老母へ鯛味噌一曲もの送甲子及小杉帰郷ニ付悉皆托ス両人午後三時川蒸瀛舟ニ搭シ帰行ス」とある。すなわち小杉虚東の川蒸気船での帰郷に際して田崎草雲、本家、小泉老母等にそれぞれ届け物を託している。人の輸送のみでなく、多くの荷物を運搬するのに舟便は極めて便宜であった。

三月に入り一三日は「相場朋厚氏明十四日午後蒸瀛へ搭シ帰郷ニ付暇乞ニ来ル」と相場朋厚が翌日午後、川蒸気船で帰郷すべく半兵衛の許に暇乞いに訪れている。そして翌一四日「午后ノ川蒸瀛ニ搭シ　勇三　朋厚　及川長　帰郷ス」と勇三、相場朋厚、川長（川島長十郎）の三人が川蒸気船で帰郷している。三月一八日は「支店常一郎帰郷ス後三時ノ瀛舟ニ搭シ」と松本常一郎が午後三時の川蒸気船で帰郷している。三月二六日は「夜十一時過かつ子明十及鏡三人小杉附添無事京着」とかつ子、明十郎、鏡が小杉虚東の付き添いで上京、二日後の二八日「午後しむ及かね小杉三人例刻ノ川蒸氣船へ乗込帰郷ス」。家族らが交代で半兵衛の看護にあたっていたようである。

四月に入り六日は「益子氏今日午后川蒸瀛舟へ搭シ橡木へ帰行」と銀行員益子右馬之介が午後の川蒸気船で帰郷。八日は「午前九時小泉　内田支店へ参ル夫〻午後蒸瀛舟ニ搭し足利へ帰省ス」。同月二二日は「〇午前十一時過鈴木折三氏横濱へ出發夫〻蒸瀛舟へ搭シ本國越前福井へ尤も郷里へ帰行ス」と、医師の鈴木折三が横浜から蒸気船で郷里の越前福井に帰郷している。翌二三日は「〇栃木銀行鈴木要三氏預り　華山　椿山　画幅弐箱一包両國川蒸瀛舟出航處通運會社へ出ス」と、鈴木要三より預かっていた（渡邊）華山、椿山の画幅二箱を船便で送るべく通運会社に委託している。このように明治一五年には人や荷物等の移送に川蒸気船が頻繁に利用されている。

（二）五月七日、東京での療養生活を終えて帰郷――半兵衛は人力車、家族たちは川蒸気船で帰郷――

約半年間にわたる東京での療養生活を終えて五月七日に半兵衛と家族が帰途につくが、帰途にあたって半兵衛は人力車、家族らは川蒸気船を利用している。当日の日誌に「午前八時半出車　緑町車夫重吉　大宮宿松初氏へ立寄午飯馳走ニナリ午後五時三十分鴻巣宿イセ半へ泊ス」とある。すなわち朝八時半に東京緑町小林家のお抱え車夫重吉の人力車で出発、大宮の「松初」（松阪屋初五郎）で昼食、夕刻、鴻巣宿「イセ半」に到着、宿泊。翌八日は「午前五時鴻巣宿出車午前十時十五分本庄内田氏へ安着・・・安養院へ墓参ス」と、午前五時に鴻巣を出車、午前一〇時一五分に本庄の内田宅に到着、墓参をし、その夜は内田宅に宿泊。翌九日は「午前八時三十分本庄宿内田せい及節三守はつ余とも人力車三輌カス川へ十一時前着・・・粕川氏へ泊ス」と、内田宅から内田せい、節三、守女はつも加わり計四人、人力車三輌に分乗して発車、午前一一時に糟川家に到着、宿泊。翌一〇日「午前八時半出車同十時過無事帰宅ス」と小俣に無事に帰宅する。家族たちもすでに帰宅しており、日誌に「闔家一同安全喜躍ニ不堪也」と記している。帰宅に際して半兵衛が人力車を利用したのは、途中、内田家、糟川家に立ち寄り退院報告等もする必要もあってのことと思われるが、半兵衛以外の家族たちは同じ五月七日に川蒸気船が帰郷している。日誌に「〇同日午後三時川蒸瀘舟へ搭しかつ　明十　鏡　愛之助　半次　合五人」とある。特に大人数での移動の場合、川蒸気船は便利でしかも迅速だったであろう。

（三）一一月、上野の絵画共進会参観で上京・・・往路は馬車と蒸気船、帰路も蒸気船（長島丸）を利用

明治一五年五月に東京での療養生活を終え帰宅した半兵衛は、六月は家族全員で四万温泉に湯治で滞在する。それについてはすでに述べた。そして半兵衛は一一月に上野で開催の絵画共進会参観のため上京している。出発日の一一月四日の日誌には「午前六時出車足利支店へ立寄同八時半通運社馬車ニ乗シ高取川岸ゟ川蒸瀘船へ搭シ川嶋長十郎氏同船無滞午後九時本材木町之宅へ安着ス」とある。すなわち午前六時に人力車で出発、足利支店に立ち寄り午前八時半に通運社の馬車に乗車、高取河岸まで行き、そこから川蒸気船に搭乗、川島長十郎も同船に搭乗し午後九時に東京本材木町の家に到着している。すなわち人力車、馬車、川蒸気船と乗り継いで上京している。

なお高取川岸は、旧藤岡町（現栃木市）の渡良瀬川北岸にある河岸で、問屋の小曾根（こそね）氏の名から「小曾根河岸」とも称された。明治三〇年代頃まで船が運行していた。

半兵衛が東京滞在中の一一月一六日は「〇小又へ敬三荷物其外掛もの反もの類　渋紙包弐箱也永島川蒸瀘舟へ積入逓送ス〇本庄宿内田氏へ鯛味噌一曲通運會社へ差出ス」と、小俣にいろいろな荷物類を送るため川蒸気船永島丸に積み入れ逓送、また本庄の内田氏に鯛味噌等を送るため通運会社に依頼している。また一一月一九日には「午後夜ニ入十一時足利町ゟ草雲老人出京到着泊ス共進會ニ付」と、足利から画聖、田崎草雲が上京している。「共進會ニ付」とあるように、（絵画）共進会参観のためであった。

約二〇日間、東京に滞在した半兵衛は一一月二四日に帰途につく。当日の日誌に「長島丸蒸瀘舟へ荷物三箱積出ス午後二時敬三共ニ蠣殻町長島出張所へ罷出夫ゟ大橋際ゟ第五号船へ搭し翌廿五日正午二時足利町支店へ安着ス銀行支店へ出張同午後六時帰宅ス」とある。すなわち往時も蒸気船を利用したが、帰郷に際しても川蒸気船（永島丸第五号）を利用している。

（四）一二月、歯の治療のため上京・・・往復とも人力車を利用

半兵衛は一二月一七日にも上京しているが、歯の治療のためであった。当日の日誌に「前八時過緑町重吉車出發粕川氏へ立寄午飯馳走三時半本庄宿へ無事着内田老翁持病ノ氣味不出来老母持病不宜全作せい看護ス」と、朝八時、車夫重吉の人力車で出車、糟川氏に立ち寄り、午後三時半、本庄に到着。内田宅に立ち寄るが「内田老翁持病ノ氣味」、「老母持病不宜」と老父母とも健康が思わしくなく、心配だったと思われる。内田宅に宿泊し、翌一八日は

「前六時本庄宿出車前夜雨降故驛路泥濘仂車速行セス漸ニシテ夜七時半材木町へ安着」と午前六時に出車するが、前夜からの降雨で「驛路泥濘仂車速行セス」と記している。道路泥濘で走行も捗らず、一三時間半を要して、ようやく夜七時半に東京材木町に到着している。

東京では歯科医小幡英之助の治療を受け、一二月二五日に帰途につく。日誌に「午前八時過出車（緑町　重吉）驛途大宮宿松初氏へ立寄午後三時三十時（注…「分」の間違い）鴻巣宿いセ半へ泊ス」と、行きと同じ車夫重吉の人力車で午前八時に出車、途中大宮宿「松初」（松坂屋初五郎）に立ち寄り、午後三時半、鴻巣宿「いセ半」（伊勢屋勝兵衛）に到着、宿泊。翌二六日は「午六時半鴻巣宿いセ半出發路中無事後三時過帰宅ス」と鴻巣からは「路中無事」で午後三時過に帰宅している。走行は順調だったようであるが、それでも昼食を挟んで約九時間も要している。以上、半兵衛の東京との往来についてみてきたが、同年七月以降の半兵衛以外の人物の東京との往来についてみてみることにする。

（五）七月以降、半兵衛以外の人の東京との往来

明治一五年も銀行用による銀行員の上京が多い。七月六日は「中島氏午后六時過東京〆帰行ス」と銀行員中島喜代次が東京から帰行している。七月一三日は「正午過東京〆敬三及僕常蔵帰郷ス」。「僕」とは従者の意味であろうか。七月一六日は「前七時足利〆東京支店常三帰京ニ付石炭酸一ビン原素支店へ送附ス」。東京支店とは木村商店の支店で、常三は従業員であろう。八月一七日は「前八時前田氏出京」。「前田氏」とは銀行足利支店勤務の前田泰次郎で、東京での銀行用を果たし一九日「午前九時前田東京〆帰店ス」。八月三一日は「同朝東京より安田善次郎氏来着アリ」。安田善次郎は、第四十一国立銀行の創業者である。九月三日は「東京〆常一郎来着」。半兵衛の二女とよの婿、松本常一郎が東京から半兵衛宅を訪れている。九月一六日は「足利町通運社川蒸瀛舟へ前八時かつ勇三敬三常一郎守平都合五人出京致ス」と、かつをはじめ家族ら五人が通運社の川蒸気船で上京、約一週間後の九月二四日「午後三時かつ東京〆無事帰宅ス」と、かつが帰宅している。一〇月九日は「〇東京〆耕観堂倅田村三次郎来着午後一時頃」と半兵衛宅に居候していた放浪画家、耕観堂の倅、田村三次郎が東京から半兵衛宅を訪れるが、翌一〇日「早天田村三次郎帰京」と、わずか一泊で帰京している。一二月六日は「前九時小泉兵八郎氏勇三共出京ス」。川蒸気船の利用が明記されているケースもあったが、交通手段が明記されていない場合は恐らく人力車であろう。

まとめ

以上、本稿は木村半兵衛の明治六年から一五年までの日誌を資料に、各所への移動の際の交通手段に注目して考察してきた。第一章では半兵衛の学区取締時代における栃木町との往来や担当学区内（足利郡、梁田郡）での諸活動における移動手段について考察した。栃木町との往来は人力車であるが、道路泥濘等で難渋することが多かった。担当区内の学校巡回等で、県官等の出役の場合は人力車利用が明記されていることが多く、半兵衛らの場合は必ずしも明記されていないことが多いが、遠距離は人力車、近距離や険しい山道等では徒歩での移動であったと思われる。半兵衛は明治一〇年に学区取締を辞し、第四十一国立銀行の設立開業に向けて尽力する。第二章では銀行設立に向けて発起人や株主等協力者を募るべく栃木県内各地を奔走、その様子や明治一一年、銀行開業後の栃木本行への往来や銀行足利支店への通勤の状況について考察した。栃木本行との往来では学区取締時代と同様、道路泥濘で難渋することが多く、足利支店への通勤も二月の積雪期、六月の梅雨期、七、八月の炎熱、九～一〇月の暴風雨の時期は道路泥濘が多く、また烈風、砂埃等、人力車は道路状況や天候の影響を直接に受ける乗り物であった。また足利支店へは徒歩での通勤もみられた。第三章では木村家の私生活面での移動について考察、家族の診療や医師の往診での足利町との往来は人力車であった。その他、知人宅訪問や所用、行楽等で足利町に赴く場合、人力車の場合もあったが、徒歩も多かった。また遠隔地への行楽、温泉

場への湯治についても考察した。大人数の場合は人力車に分乗していた。また銀行開業前後から半兵衛らの銀行用や行楽等での上京も多くなる。第四章では半兵衛をはじめ家族、親戚知人、木村家の従業員、銀行員等の東京との往来における交通手段の変遷について考察した。当初は専ら人力車であったが、明治一〇年代に入ると乗合馬車や舟の利用もみられるようになる。特に明治一四、五年には東京～本庄間など関東地方に乗合馬車が普及、また特に明治一五年には蒸気船の利用が急増している。なお明治一六年夏には、上野～熊谷間に鉄道が開通、以後、東京との往来においては鉄道の利用がみられるようになる。そして鉄道路線に関し半兵衛らは地元の産業振興の観点から東北本線「第二区」（埼玉県～宇都宮間）について足利、栃木等を経由する路線を主張、鉄道誘致運動を展開する。その鉄道誘致運動を含め、明治一六年以降の東京はじめ各所との移動の際の交通手段についての考察は稿を改めることにする。

注

（一）拙稿①「三代目・木村半兵衛の日誌（明治八～一八年）にみる年頭の諸行事、年中行事（国の祝日、宮中行事）、地元神社の祭礼等に関する考察」（『足利大学研究集録　第五五号』二〇二〇・三）。拙稿②「三代目・木村半兵衛の日誌（明治八～一八年）にみる名所の観光、行楽、寺社の参詣、温泉場への湯治等に関する考察」（同前）

（二）木村半兵衛の各年の日誌の翻刻および公刊に関しては、（注一）掲出拙稿①九三頁参照。本稿での半兵衛の日誌の引用もそれに拠る。

（三）谷釜尋徳著『歩く江戸の旅人たち　スポーツ史から見た「お伊勢参り」』（晃洋書房）によると、江戸時代の旅人たちの歩く距離は一日平均約三四・一キロ、時間にして一日一〇時間程度だったという。

（四）『明治世相編年辞典』（朝倉治彦・稲村徹元編　東京堂出版「明治三年　人力車」三五頁

（五）同右書「明治四年　人力車」四七、四九頁

（六）同右書「明治二〇年　東京の人力車」二七六頁

（七）『栃木県史　通史編6・近現代一』栃木県史編さん委員会　一九八二年刊　九六頁

（八）明治六～一〇年の各年の進級試験の実施状況については、足利工業大学『東洋文化』に以下の論文を連載している。拙稿①「学区取締木村半兵衛の日誌にみる明治初期の足利地方における進級試験の実施状況―その一・明治六年と七年の日誌を資料に」（第30号　平成二三年一月）、拙稿②「同右―その二・明治八年の日誌（『明治八年一月ヨリ同十二月廿一日ニ至　雑記』を資料に）（第31号　平成二四年一月）、拙稿③「同右―その三・明治九年と一〇年の日誌を資料に」（第32号　平成二五年一月）

（九）『「世のちり洗う四万温泉」図録』中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」企画展　平成二九年六月三〇日発行　五頁

（一〇）『足利市歴史研究紀要第一集　三代目　木村半兵衛の日誌　翻刻解説～「学区取締」としての活動～』三〇頁

（一一）前掲『明治世相編年辞典』「明治二年　乗合馬車」二四頁

（一二）同右書「明治四年　馬車」五四～五頁

（一三）同右書「明治五年　馬車規則」六七頁

（一四）同右書「人力車　馬車の台数」一九〇頁

（一五）同右書「明治五年　馬車開業」八〇頁

（一六）注（七）掲出『栃木県史　通史編6・近現代一』九六頁

（一七）前掲『明治世相編年辞典』「明治一〇年　乗り合い馬車」一五〇頁

（一八）同右書「明治一二年　乗り合い馬車」一七二頁

（一九）同右書「明治一五年　馬車会社」二〇八頁

原稿受付日　令和3年2月8日